消防操典

特100
989

始

誤表

頁	行	誤	正
二	九	所屬警察署長	所屬警察官署長
二	一〇	警察署長ハ	警察署長又ハ
一八	二	両ノ	両足ノ
一八	四	憩セシムル	第三休憩セシムル
三五	九	列員ハ半右	列員ハ右(左)向
三八	一一	測面	側面
三九	七	測面	側面
四七	一	第二 第一	第一 第二
六二	一一	握	握リ
六五	六	爪ヲ上ニ	下ニ
七四	三	挺環	挺環
七七	八	紮直	紮着
九四	九	擧ク	ケ
九九	九	左足	右
九九	一二	ニモ	テ
一〇三	六	第三便卒	第三吸管
一〇三	八	喞吸	喞筒
一〇七	四	磨滅	磨
一〇八	九	磨減	磨滅
一〇八	一〇	漏田	出
一〇九	二	シ	ス
一一三	六	管吸	管鎗
秋田縣令第五號			
一〇		所官轄警察	所管並所轄警察分署
二	五	其ノ他災	其ノ他火災
一五	七	手常	手當
一七	一二	組頭副小頭	組頭小頭副小頭
一九	九	粗略	粗暴

特100.
989

消防操典目次

綱領

第一章
第二章
第三章
第四章
第五章
第六章
第七章
第八章

禮服
點檢
各隊列敎練
車輛各敎練
車輛隊列敎練
喞筒保存法
裝式

附錄

消防組規則 明治二十七年二月 勅令第一五號
消防組規則施行細則 明治四十二年二月 秋田縣令第五號
喞筒分解圖

大正
2. 7. 4
內交

◎綱領

第一　消防教練ノ目的ハ消防組員ヲ訓練シテ嚴正ナル紀律及秩序アル行動ニ習熟セシムルト同時ニ機械器具ノ取扱ヲ熟達セシメ兼テ勇敢耐忍活潑葷固ナル精神ヲ涵養シテ火災ノ場合ニ於ケル實際ノ要求ニ適應セシムルニ在リ

第二　組頭小頭ハ操典ヲ遵守シテ其ノ趣旨ニ從ヒ部下ヲ訓練シ以テ操典ノ目的ヲ達スヘキ責任ヲ有ス又警察官署長ハ絶ヘス教練ノ實施ヲ監督指導シテ其ノ進歩發達ヲ圖リ苟モ過誤及不進歩ノ點アルヲ發見スルトキハ直ニ之ヲ矯正スルヲ要ス

第三　教練ハ順序ヲ逐フテ實施シ而シテ教練中ハ上下共ニ熱心之ニ從事シ速ニ熟達スル樣精勵スヘシ

第四　教練ヲ行フニハ組員ヲシテ其ノ目的精神ヲ會得セシメ之ヲ

實地ノ上ニ現ハサシムルコト肝要ナリ決シテ教練ヲシテ形式ニ陷ラシメテ實用ニ適セサルニ至ラシメサル樣注意スヘシ

第五　同一ノ動作ヲ長ク續行スルトキハ心身ヲ倦勞セシムルカ故ニ時々動作ヲ變換シ其ノ方法及時間ハ組員ノ能力又ハ躰力ニ適當セシムルヲ要ス

第六　最初ノ教育ニ感染シタル弊習ハ容易ニ脫却シ難キヲ以テ組員ノ訓練ニ付テハ最モ注意スルヲ要ス

第七　協同一致ハ消防ノ目的ヲ達スル爲最モ必要ナルモノニシテ各人各個ノ行動ヲ許サス必ス指揮者ノ命令ニ依リテ行動スルヲ要ス故ニ組員タル者ハ常ニ上下ノ區別ヲ明確ニシ指揮者ノ命令ハ堅ク服從シ決シテ反抗ノ處爲アルヘカラス

第八　號令ハ組員ノ動作ヲシテ確實活潑ナラシメ所謂動作ハ號令

ノ反響ナルヲ以テ指揮者ハ堅確ノ決意嚴肅ノ態度明快ノ音調ヲ以テ簡明ニシテ確切且活潑明瞭ナル號令ヲ發唱スルヲ要ス

第九　號令ハ豫令ト動令トニ別ツ豫令ハ明瞭ニ音響高ク且長ク發唱シ動令ハ活潑ニ短ク發唱シ而シテ豫令ト動令トノ間ハ適當ナル時間ヲ存スヘシ（適當ナル時間トハ豫令ノ後チ動令ニテ如何ニ動作スヘキヤノ判斷及準備ニ費ス時間ヲ云フ）

第十　教練ニ際シ各動作ヲ說明スル場合ニハ指揮者ニ於テ躬カラ其動作ヲ行フテ範ヲ示シ且丁寧懇切ニ說示シテ十分ニ會得セシムルヲ要ス

第十一　教練ニ際シテ指揮者ノ採ルヘキ普通ノ位置ハ之ヲ規定スト雖便宜一時適當ト認ムル處ニ占位スルヲ妨ケス

第一章　禮式

第一　禮式ハ上下ノ順序ヲ正シ尊敬ヲ表スルモノナルヲ以テ忠實ニ恭敬ノ意ヲ盡スモノトス

第二　消防組員ニシテ定制ノ服裝ヲ爲シタルトキハ本則ニ依リ禮式ヲ行フヘシ

第三　消防組員ノ敬禮スヘキ人左ノ如シ

組頭、小頭、副小頭、ニ在リテハ知事、警務長、警視、警部、警部補、指揮係警察官

消防手ニ在リテハ前號ノ人ノ外組頭、小頭、副小頭

消防組所屬市町村長ニ對シテハ前例ニ準シテ敬禮スヘシ

第四　消防組員同僚ノ間ニ在リテハ互ニ敬禮スヘシ但シ新參ノ者ヨリ先キニ行フモノトス

第五　職務施行ノ止ムヲ得サル場合ニハ欠禮スルヲ妨ケス

第六　敬禮ハ階級ノ異ナル二人以上ニ對シテハ其ノ最高級ノ人ニ對シテ行フヘシ此ノ場合ニ於テ禮ヲ受クヘキ者ハ皆答禮スヘシ

第七　禮式ヲ別ケテ室內ノ敬禮及室外ノ敬禮トス

室內トハ居室、事務所、應接所、式場（野外ノ式場ニシテ防圍アルトキハ亦同シ）等ニシテ廊下階段玄關等ハ室外トス

第八　室內ノ敬禮ハ敬スヘキ人ヲ離ル、コト凡ソ三四歩ノ所ニ止リ兩足ヲ整ヘ正面シテ姿勢ヲ正シ其ノ眼ニ注目シ右手ニ帽ノ前庇ヲ摘ミ之ヲ垂直ニ提ケ帽ノ內部ヲ右股ニ對セシメ左手ヲ垂下シ体ノ上部ヲ稍々前方ニ傾クヘシ

第九　室外ノ敬禮ハ敬スヘキ人ニ對シ直立シ姿勢ヲ正シ兩足ヲ整ヘ右手ヲ擧ケ諸指ヲ接シテ食指ト中指ヲ帽ノ前庇ノ右側ニ當テ

掌ヲ稍々外面ニ向ケ肘ヲ肩ニ齊シクシ左手ヲ垂下シ体ノ上部ヲ前方ニ傾クコトナク敬スヘキ人ノ眼ヲ注目スヘシ

第十　消防組員ニシテ法被服裝ヲ爲ス者ハ室外ノ敬禮ヲ行フ場合ニハ敬スヘキ人ニ對シ直立シ姿勢ヲ正シ兩足ヲ整ヘ脫帽ノ禮式ハ室内ノ敬禮ニ同シ

第十一　物品ヲ携帶シ相當ノ禮式ヲ行フ能ハサルトキハ禮ヲ受クヘキ人ニ對シテ直立シ兩足ヲ整ヘ其ノ眼ニ注目シ体ノ上部ヲ少シク前方ニ傾クヘシ

第十二　辭令其ノ他ノ物ヲ受クルニハ授與者ノ席ヲ離ルヽコト凡ソ三四歩ノ處ニ到リ室内ノ敬禮ニ準シテ禮式ヲ行ヒタル後適宜ニ前進シ直立シテ姿勢ヲ正シ帽子ヲ左脇ニ挿ミ右手ニ左手ヲ副テ拜受シ左手ニ授與セラレタル物ヲ持チ右手ヲ以テ左脇ヨリ帽

子ヲ取リ之ヲ垂直ニ提ケ再ヒ敬禮ヲ行ヒ前進シタル歩數丈ケ退歩シ右轉回ヲ爲シ退出スヘシ

第十三　隊列ヲ爲シテ行進中受禮者隊ノ前面又ハ側面ヨリ來ルトキハ凡ソ五六歩ノ距離ニ於テ指揮者ハ「歩調ヲ取レ」ノ號令ヲ下ス此場合ニ於テ全員ハ姿勢ヲ正シ歩調ヲ取ルヘシ次キニ指揮者ハ「頭―右(左)」號令ヲ下ス此號令ニ依リ全員ハ頭ヲ右「左」ニ向ケ受禮者ニ注目シ「直レ」ノ號令ヲ俟ツテ舊ニ復ス

指揮者ハ「頭―右(左)」ノ號令ヲ下シタル後擧手注目ノ敬禮ヲ行ヒ終リタルトキ列員ニ對シ「直レ」ノ號令ヲ下スヘシ

第十四　隊列ヲ爲シテ停止セル場合ニ受禮者隊ノ前面又ハ側面ニ來リタルトキハ「氣ヲ著ケ」ノ號令ヲ下スヘシ此場合ニ於テ全員ハ姿勢ヲ正フシ指揮者ノミ受禮者ニ面シ擧手注目ノ敬禮ヲ行ヒ

タル後列員ヲ休憩セシムルノ必要アルトキハ「休メ」ノ號令ヲ下スヘシ

第十五　演習ニ於テ分列式ヲ行フ場合ニハ指揮者ハ隊ノ前方四歩ノ處ニ位置ヲ占メ基點ヨリ全員ニ悉ク歩調ヲ取ラシメ受禮者ノ地位ノ線ヨリ五六歩ノ處ヨリ頭―右(左)ノ號令ヲ下スヘシ全員ハ此號令ニ依リ一齊ニ頭ヲ右(左)ニ向ケ受禮者ニ注目シ指揮者モ號令ヲ下スト同時ニ頭ヲ右(左)ニ向ケ注目ノ敬禮ヲ行ヒ受禮者ノ地位ノ線ヨリ五六歩經過シタル後「直レ」ノ號令ヲ下スヘシ此號令ニ依リ全員悉ク一齊ニ頭ヲ舊ニ復ス

第二章　服　裝

第一　演習及點檢ノ場合ニハ規定ノ服裝ヲ爲スヘシ

演習ノ場合ニ於テハ消防組ニ關スル徽章ヲ佩用スヘシ

未タ規定ノ服裝ノ下渡ヲ受ケサル消防組ニ在リテハ適宜ノ服裝ヲ爲シ左腕ニ一定ノ布片ヲ附スヘシ

第二　前項ノ場合ニハ鷹匠ヲ穿ツカ又ハ黑足袋ノ上ニ草鞋ヲ穿ツヘシ但シ組又ハ部全員一樣タルコトヲ要ス

股引ノ赤筋ヲ脚袢ノ類ヲ以テ蔽フヘカラス手袋アル者ハ之ヲ著用スヘシ頭巾ヲ携フルトキハ其紐ヲ左肩ニ掛ケ之ヲ背部ニ負フヘシ

組頭以下ノ役員ニシテ制服着用ノ者ニ在リテハ靴ヲ穿ツコトヲ妨ケス但シ短靴ヲ穿ツ場合ハ黑ノ「ゲートル」又ハ脚袢ヲ用ウヘシ

第三　組頭以下役員ハ二尺位ノ手鳶口ヲ上衣又ハ法被ノ下左方ノ腰部ニ佩フヘシ

第四　組員ニシテ一定ノ帶ヲ使用スル者ハ點檢操練ノ場合ハ法被

ノ下ニ佩ヒ若シ機械ノ取扱梯子乘其ノ他實地ノ運動ノ場合ニハ被服ノ上ニ佩フヘシ

第五　帽子ノ顎紐ハ實地ノ動作ノ場合又ハ風雨其ノ外必要ノ場合ニ之ヲ用ウヘシ

第三章　點檢

第一　點檢ハ演習ノ際當番員出務ノ際及現場引上ケノ際之ヲ行フ但シ必要ノ場合ニハ臨時點檢ヲ行フヘシ

第二　消防演習ハ毎年二回以上行フモノトス

第三　點檢ハ人員服裝姿勢及機械器具其ノ他携帶品ノ保存使用ノ適否ヲ檢査スルモノトス

第四　水火災現場引上ケノ際ハ其ノ現場ニ於テ先ツ人員ノ點檢ヲ爲シ傷痍ノ有無ヲ取調ヘタル後チ機械器具被服其ノ他携帶品ノ

破損ノ有無ヲ嚴重ニ檢査スヘシ

第五　機械器具ニシテ使用シタルモノハ克ク洗滌シタル後チ又修繕シタルモノハ竣工ノ後チ警察官ニ於テ點檢スヘシ其ノ不在ノトキハ組頭又ハ小頭ニ於テ點檢スヘシ

第六　喞筒其ノ他機械ニシテ組立テアルモノハ之ヲ分解シテ內部ノ檢査ヲ爲スヘシ

第七　機械器具ノ檢査ハ時々嚴密ニ之ヲ施行シ破損アルモノハ速ニ之カ修理ヲ爲サシムヘシ

第八　點檢ヲ行フトキハ所屬警察署長ハ其ノ代理者ヲ點檢官トシ組頭又ハ小頭ヲ指揮者トス所屬警察官署長ハ其ノ代理者不在ノトキハ組頭ヲ點檢者トシ小頭ヲ指揮者トス

第九　點檢ノ隊形ハ通常二列横隊トス但シ集合地ノ地形人員ノ多

寡ニ依リ一列横隊又ハ縦隊若クハ片手間隔ノ横隊或ハ半圓形ニ作ルコトヲ得

第十　指揮者ハ隊列ノ前面凡ソ五六歩ノ所ニ在リテ列員ニ面シ中央ニ位置シテ號令ヲ下スヘシ

點檢官ハ指揮者ノ右側凡ソ二歩ヲ隔テ、列員ニ面シ占位ス

小頭代リテ指揮者タル場合ニハ組頭ハ指揮者ノ左側二歩ノ後方ノ處ニ位置シテ列員ニ面スヘシ

指揮者タラサル副小頭以上ノ者ハ前列右翼ニ列シ若シ餘員アルトキハ同左翼ニ列シ尚餘員アルトキハ列後中央二歩ノ處ニ位置シ押伍ト爲ルヘシ

第十一　集合ハ「集マレー」ノ號令又ハ喇叭ヲ以テス

第十二　組頭(部ニ分ツトキハ部長タル小頭)ハ左ノ方法ニ依リ平

素組員ノ集合順序ヲ定メ置クヲ要ス但シ現場點檢ニ在リテハ便宜集合セシメ身幹ノ順序ニ依ラサルモ妨ケナシ

一　身幹長短ノ順序ニ從ヒ約二尺四寸（此距離ハ前列員ノ背ヨリ後列員ノ胸マテヲ量ルノ）距離ヲ隔テ、二列横隊ニ編成シ其ノ前後ニ立チタル二人ヲ伍トシ各伍中長大ナル者ヲ前列ニ置ク列員奇數ナルトキハ左翼ノ後列ヲ缺ク之ヲ缺伍トス

二　後列員ハ正シク前列員ニ重ナリ同方面ニ位置ス

三　各列員間ノ間隔ハ肘肘互ニ接觸スルコトナク行進ニ當リ手ヲ前後ニ振動スルヲ妨ケサルヲ要ス而シテ此間隔ハ右手ヲ膆骨上ニ當テ肘ヲ側方ニ張リタトルトキ輕ク右隣員ノ左臂ニ觸ルヽヲ度トス

四　番號ハ前列正面ニ在リテ右ヨリ左ニ之ヲ附ス

五　前列ノ兩翼ニ各一名ノ嚮導ヲ置ク

第十三　點檢ノ際ハ指揮者ハ點檢官ノ臨場時刻ヨリ約十分前ニ整列シ置クヘシ

第十四　指揮者ハ組員ヲ集合セシムルニハ左ノ號令ヲ下スヘシ

「集マレー(又ハ喇叭)」

此號令ニテ組員ハ指揮者ノ下ニ集マリ之ニ面シ凡ソ五六歩ヲ隔テ番號ノ順序ニ從ヒ集合スヘシ

指揮者ハ豫メ編成隊形ヲ一列又ハ二列横隊ト告知シ置クヘシ

第十五　集合終レハ指揮者ハ順次左ノ號令ヲ下シ第四章及第五章ノ要領ニ從ヒ列員ヲ整頓セシムヘシ

一　「氣ヲ著ケ」

二　「番號」

三　「嚮導(何歩)前ヘ」

四　「右ヘー準ヘ」

五　「直レ」

若シ二列横隊ナルトキハ左ノ號令ヲ下シ前後列間ヲ三歩ノ距離ニ展開ス

「前列三歩前ヘー、進メ」

此號令ニテ前列員ハ左足ヨリ三歩前進ス

第十六　前項ノ動作ヲ終レハ左ノ號令ヲ下シ列員ヲ其ノ位置ニ於テ休憩セシメ點檢官ノ臨場ヲ待ツモノトス

「休メ」

此號令ニテ列員ハ第四章第三ノ要領ニ據ル

第十七　點檢官臨場シタルトキハ指揮者ハ「氣ヲ著ケ」ノ號令ヲ下

シ列員ニ不動ノ姿勢ヲ取ラシメ直ニ點檢官ノ下ニ至リ相當ノ敬禮ヲ行ヒタル後人員ノ報告ヲ爲スヘシ

第十八　点檢官ハ人員ノ報告ヲ受ケ終レハ直ニ列ノ右翼前面ヨリ左翼ヲ通過シテ背後ニ廻ハリ若シ二列ナルトキハ後列モ前列ノ如クシ（縱隊又ハ半圓形ノ場合ハ適宜トス）服裝姿勢ヲ檢査シ終リテ定位ニ就クヘシ

前項點檢ノ際ハ組頭ハ点檢官ニ隨行スルモノトス

第十九　前項ノ點檢終ラハ左ノ號令ニ依リ解散又ハ其儘休憩セシムヘシ

「解レー進メ」（休メ）

解散ノ場合ニ於テハ列員ハ点檢官ニ對シ一齊ニ敬禮ヲ（第一章禮式ノ要領ニ依リ）爲シテ解散スヘシ

第四章　各個教練

第一　各個教練ノ目的ハ姿勢ヲ嚴正ニシ動作ヲ確實ナラシメ紀律ヲ涵養シ隊列教練ノ基礎ヲ作ルニ在リ故ニ特ニ意ヲ用ヒ嚴格ニ之ヲ行フコトヲ要ス

不動姿勢

第二　不動ノ姿勢ヲ取ラシムルニハ左ノ號令ヲ下ス

「氣ヲ著ケ」

此號令ニテ兩踵ヲ一線上ニ揃ヘテ之ヲ著ケ兩足ハ約六十度ニ開キテ齊シク外ニ向ケ両膝ハ凝ラスシテ之ヲ伸ハシ上体ハ正シク腰ノ上ニ落チ著ケ且少シク前ニ傾ケ両肩ヲ稍〻後ロニ引キ一様ニ之ヲ下ケ兩臂ハ自然ニ垂レ掌ヲ股ニ接シ指ハ輕ク伸ハシテ之ヲ竝ヘ小指ヲ袴ノ縫目ニ當テ頭ハ正シク且自然ニ保チテ頸ヲ眞

直ニシ口ヲ閉チ兩眼ハ十分之ヲ開キ目ノ高サノ前方ヲ直視ス

両足ノ位置正シカラサレハ從テ肩ノ位置編移スルモノナルヲ以テ兩足ハ之ヲ正シク置クコト最モ肝要トス

第三　休憩セシムルニハ左ノ號令ヲ下ス

「休メ」

此號令ニテ姿勢ニ意ヲ留ムルコトナク先ツ右足ハ其儘舊位ニ置キ左足ヲ半歩程其ノ方向ニ出シ其ノ場ニ立チテ休憩ス

若シ右足ヲ休メント欲セハ正シク左足ヲ舊位ニ復シ右足ヲ左足ヲ休メタル如ク出シテ休憩ス

休憩中ト雖モ兩足同時ニ舊位ヲ離シ又ハ談話スルコトヲ嚴禁ス

轉回

第四　右(左)向或ハ半右(左)向ヲ爲サシムルニハ左ノ號令ヲ下ス

「右(左)向ケー右(左)」

「半右(左)向ケー右(左)」

此號令ニテ左足尖ト右足トヲ少シク上ケ左踵ニテ九十度(右(左)向ノトキ)或ハ四十五度(半右(左)向ノトキ)右(左)ニ向キ右踵ヲ左踵ニ著ケテ同線ニ揃フ

第五　後向ヲ爲サシムルニハ左ノ號令ヲ下ス

「廻レー右」

此號令ニテ右足ヲ其ノ方向ニ引キ足尖ヲ僅ニ左踵ヨリ離シ兩足尖ヲ少シク上ケ腿ヲ屈ムルコトナク兩踵ニテ後ロニ廻ハリ次ニ右踵ヲ左踵ニ引著ク

速歩行進

第六　速歩行進セシムルニハ左ノ號令ヲ下ス

速歩ハ一歩ノ長サヲ踵ヨリ踵マテ二尺五寸トシ其ノ速度ハ一分時間百十四歩トス

「前へー進メ」

「前へー」ノ豫令ニテ体ノ重ミヲ全ク右足ノ上ニ移ス

「進メ」ノ動令ニテ左脚ヲ少シク上ケテ前ニ出シ足尖ヲ僅ニ外ニ向ケ上躰ヲ少シク前ニ傾ケ右足ヨリ二尺五寸ノ處ニ脚ヲ伸ハシツヽ故ラニ地面ヲ敲クコトナク踏著ケ同時ニ腿ヲ地面ノ方ニ壓シテ伸ハシ全ク体ノ重ミヲ踏著ケタル足ノ上ニ移ス左足ヲ踏著クルト同時ニ右踵ヲ地ヨリ離シ左脚ニ就キテ説示シタルト同法ニテ右脚ヲ前ニ出シ同距離ノ處ニ踏著ケテ行進ヲ續ケ兩足ヲ交叉スルコトナク膝ヲ必要ヨリ高ク上グルコトナク兩肩ヲ廻ハスコトナク頭ヲ眞直ニ保チ指ハ栂指ヲ外ニシテ輕ク握リ兩臂ヲ自

然ニ振ル

第七　速歩行進間ニ行進ヲ容易ナラシムルニハ左ノ號令ヲ下ス

「歩調止メ」

此號令ニテ正規ノ歩法ヲ守ルコトナク速歩ノ歩長ト速度トヲ保チ姿勢ヲ崩スコトナク行進ス

再ヒ正規ノ歩法ヲ取ラシムルニハ左ノ號令ヲ下ス

「歩調ヲ取レ」

第八　行進ヲ停止セシムルニハ左ノ號令ヲ下ス

「全隊ー止レ」

此號令ニテ後ノ足ヲ前ノ足ニ引著ケテ止ル

第九　退歩セシムルニハ左ノ號令ヲ下ス退歩ハ小距離ニ用ウルモノニシテ其ノ速度ハ速歩ノ場合ニ同シ

「後へ一進メ」

此號令ニテ左足ヲ後方ニ引キ輕ク膕ヲ屈メテ前足ヨリ概ネ半歩ノ處ニ置キ次ニ右足モ左足ト同動作ニテ續テ退却シ「全隊ー止レ」ノ號令ニテ前ナル足ヲ後ナル足ニ引著ケテ止ル

此號令ニ代フルニ「何歩後へ進メ」ト令シ此ノ動作ヲ爲サシムルコトヲ得

足踏

第十　行進間足踏ヲ爲サシムルニハ左ノ號令ヲ下ス

「足踏ミー進メ」

此ノ號令ニテ進ムコトナク少シク膝ヲ屈メ交々兩足ヲ踏著ケテ調子ヲ取ル

更ニ行進セシムルニハ左ノ號令ヲ下ス

「前へー進メ」

「進メ」ノ動令ハ通常左足ノ地ニ著カントスルトキ下スモノトス

此動令ニテ左足ヨリ踏出シ續キテ行進ス

右(左)向行進

第十一　行進間右(左)向ヲ爲サシムルニハ左ノ號令ヲ下ス

「右(左)向ケ前へー進メ」

左(右)足ヲ前ニ踏著ケ其ノ足尖ニテ体ヲ右(左)方ニ向ケ右(左)足ヨリ新方向ニ行進ス

「進メ」ノ動令ハ右向ノ場合ニハ右足ノ地ニ著カントスルトキ左向ノ場合ニハ左足ノ地ニ著カントシタルトキ下スモノトス

斜行進

第十二　斜行進ヲ爲サシムルニハ左ノ號令ヲ下ス

「斜ニ右(左(ヘー進メ」

行進間ニ在リテハ「進メ」ノ動令ハ通常斜右ノトキハ右足斜左ノトキハ左足ノ地ニ著カントスルトキ下スモノトス

行進間ニ在リテハ此號令ニテ左(右)足ヲ前ニ踏著ケ其ノ足尖ニテ体ヲ半右(左)ニ廻シ右(左)足ヨリ新方向ニ行進ス

停止間ヨリ直ニ斜行進ヲ爲スニハ前ト同號令ニテ先ツ半右(左)向ヲ爲シ左足ヨリ新方向ニ前進シ直行進ニ復セシムルニハ左ノ號令ヲ下ス

「斜メニ左(右)ヘー進メ」

此號令ニテ斜行進ヲ爲スト同法ヲ以テ直行進ニ復ス

第十三　行進間後向轉回

行進間後向ヲ爲サシムルト同時ニ前進セシムルニハ左ノ

號令ヲ下ス

「廻レ右前ヘー進メ」

動令ハ通常右足ノ地ニ著カントスルトキ下スモノトス

此號令ニテ左足ヲ前ニ踏着ケ其ノ足尖ニテ後向トナリ右足ヲ左足ニ引着ケテ更ニ左足ヨリ行進ス

後向ヲ爲サシムルト同時ニ停止セシムルニハ左ノ號令ヲ下ス

「廻レ右ヘー止レ」

第十四　行進間踏替

「踏替ー進メ」

此號令ニテ上ケタル足ヲ前ニ踏着ケ後ナル足尖ヲ踏着ケタル前ノ足ニ引着ケ更ニ前ノ足ヨリ行進ス駈足ニ在リテハ片足ニテ二

歩行進ス足踏間ニ在リテハ駈歩間ノトキノ方法ニ準ス

駈歩行進

第十五　駈歩行進ヲ爲サシムルニハ左ノ號令ヲ下ス

駈歩ハ一歩ノ長サヲ二尺八寸(踵ヨリ踵マテ)トシ其ノ速度ハ一分時間百七十歩ヲ基準トス

「駈歩ー進メ」

「駈歩ー」ノ豫令ニテ兩手ヲ握リ腰ノ高サニ上ケ肘ヲ後ロニシ輕ク体ニ接ス

「進メ」ノ動令ニテ左脚ヲ前ニ出ス其ノ方法ハ兩脚ヲ少シク屈メテ僅ニ左股ヲ上ケ足尖ヨリ下ロシテ右足ヨリ二尺八寸ノ處ニ蹈著ケ次ニ左脚ト同法ニ依リ右脚ヲ前ニ出シ常ニ体ノ重ミヲ踏著ケタル足ニ移シ兩肘ヲ自然ニ振リツヽ行進ス

「全隊ー止レ」ノ號令ニテ二歩前進シタル後チ速歩ト同方法ニ依リ停止シ兩手ヲ垂下ス

第十六　駈歩行進ヨリ速歩行進ニ移ラシムルニハ左ノ號令ヲ下ス

「速歩ー進メ」

二歩前進シタル後速歩ニ移リ兩手ヲ下ロシ續キテ行進ス

解散

第十七　運動ノ終ニ際シ組員ヲ解散セシムルニハ左ノ號令ヲ下ス

「解レ進メ」

此號令ニテ姿勢ヲ正シ行禮シテ解散ス

第五章　隊列教練

第一　隊列教練ニ於テハ組員ヲ身幹ノ順序ニ從ヒ一列或ハ二列ニ編成シ二列ニ編成スルトキハ後列員ハ前列員ノ背ヨリ二尺五寸

ノ距離ヲ隔テ、正シク前列員ニ重ナリテ同方向ニ位置ス其ノ前後ニ立チタル二人ヲ伍ト謂フ列員奇數ナルトキハ左翼ノ後列ヲ欽ク之ヲ欽伍ト云フ各列員ノ間隔ハ左手ヲ腰ニ當テ肘ヲ側方ニ張リタルトキ左隣員ノ右臂ニ觸ル、ヲ度トス各伍ハ前列ニ在リテ右ヨリ左ニ番號ヲ附ス之ヲ正面トス

前列ノ兩翼ニ各一名ノ嚮導ヲ置ク

組頭ニシテ指揮者タラサル者ハ列外員トス小頭ニシテ指揮者タラサル者ハ後列中央ヨリ二歩ノ所ニ位置ス之ヲ押伍ト云フ

集合

第二　組員ヲシテ列ヲ編成セシムルニハ左ノ號令ヲ下ス

「集レー」一列横隊(二列横隊)

此號令ニテ組員ハ指揮者ニ面シ之ト離ル五六歩ノ所ニ占位ス

列ニ就クトキハ上体ヲ前後ニ出スコトナク整頓翼ヲ目視シツ、線ニ入ルヘシ

集合終レハ指揮者ハ左ノ號令ヲ下ス

「氣ヲ著ケ」

此號令ニテ列員ハ第四章第二ニ準シ不動ノ姿勢ヲ取ル

次ニ番號ヲ附スル爲左ノ號令ヲ下ス

「番號」

此號令ニテ右翼首位ノ者ヨリ最モ迅速且活潑ニ番號ヲ唱ヘツ、少シク頭ヲ左ニ振リ順次末尾ニ至ル

整頓

第三　隊列ヲ爲シタル列員ヲ整頓線ニ就カシムルニハ先ツ両翼嚮導ヲ其ノ線上ニ出ス之カ爲メ左ノ號令ヲ下ス

「嚮導(何)歩前へ」

此號令ニテ兩翼嚮導ハ指示セラレタル歩數丈前進シ指揮者ハ其ノ位置ヲ正ス

次ニ左ノ號令ヲ下ス

「右(左)へ—準へ」

「準」ヘノ動令ニテ各列員ハ前進シ最後ノ一歩ヲ縮メ少シク整頓線ヨリ後方ニ止マリ次ニ頭ヲ右(左)ニ廻シ胸ヲ屈ムルコトナク小歩ニテ靜ニ整頓線ニ就ク後列員ハ正シク前列員ニ重ナリテ距離ヲ取リ右(左)ノ方ニ整頓ス右(左)翼嚮導ハ速ニ整頓ノ基礎ヲ定ムルタメ反對翼嚮導ヲ目標トシ先ツ己ニ近キ二、三、員ノ位置ヲ正シ必要ニ應シ逐次ニ整頓ヲ正ス反對翼嚮導ハ己ニ近キ二、三、員ノ位置ヲ正シ以テ整頓ヲ補助ス

「直レ」ノ號令ニテ一齋ニ頭ヲ正面ニ復ス

其ノ位置ニ於テ整頓セシムルニハ單ニ「右(左)へ準へ直レ」ノ號令ヲ下ス

轉回

第四　一列或ハ二列横隊ニ在ル列員ヲ背面ニ向ハシムルニハ左ノ號令ヲ下ス

「廻レー右」

此號令ニテ各列員ハ第四章第五ニ則リ背(正)面ニ向キ欽伍及兩嚮導ハ前列ニ就ク

直行進及停止

第五　隊列ヲ行進セシムルニハ左ノ號令ヲ下ス但シ直行進ハ常ニ右方ニ嚮導ヲ取ル若シ左方ニ取ルトキハ特ニ「嚮導左」ト令ス

「前へ―進メ」

此號令ニテ列員ハ一齋ニ行進ヲ起シ嚮導ニ準フテ横隊面ト直角ニ行進シ嚮導ハ列員ニ關スルコトナク正面ニ目標ヲ取リ（特ニ目標ヲ示サレタルトキハ之ニ從フ）正規ノ歩長ト速度トヲ保チ全員ノ基準ト爲ル

駈足ヲ以テ直行進ヲ行フニハ「駈足―進メ」ノ號令ヲ以テス

指揮者ハ「前へ―進メ」ノ號令ヲ下スニ先チ通常行進目標ヲ嚮導ニ示スモノトス

行進中嚮導ヲ他翼ニ取ルヲ要スルトキハ「嚮導左(右)」ノ號令ヲ下ス

第六　行進間列員ノ遵守スヘキ要件左ノ如シ

嚮導何レノ方ニ在ルモ常ニ頭ヲ正シク保ツコト

整頓翼ヨリ押シ來ルトキハ之ニ從ヒ反對ノ方ヨリ押シ來ルトキハ之ヲ支フルコト

整頓線ヨリ進ミ或ハ後レ又ハ間隔ヲ失ヒタルトキハ漸次ニ回復スルコト

歩ノ違ヒタルトキハ踏替ヲ爲シ速ニ嚮導ノ方ナル隣員ノ歩ニ準フヘキコト

第七　行進ヲ停止セシムルニハ左ノ號令ヲ下ス

「全隊―止レ」

此號令ニテ各員停止シテ各自ニ嚮導ノ方ニ整頓シ頭ヲ正面ニス

側面向ニ在リテハ停止シタル儘動クコトナシ

斜行進及後轉回

第八　直行進間ニ斜行進ヲ爲サシムルニハ左ノ號令ヲ下ス

「斜メニ右(左)ヘ進メ」

斜行進ノ方向ハ通常横隊面ト四十五度ノ角度ヲ爲スモノトス

斜行進ニ在リテハ各員ノ位置正シキトキハ其ノ肩、互ニ平行シ右斜行進ニ在リテハ各員ノ右肩其ノ右隣員ノ右肩ノ後ロニ在リ左斜行進ニ在リテハ之ニ反ス各員ハ常ニ斜行スル方ニ整頓ス

第九　再ヒ直行進ニ復セシムルニハ左ノ號令ヲ下ス

「斜メニ左(右)ヘ一進メ」

此號令ニテ各員ハ斜行進ニ爲リタル反對ノ動作ヲ以テ直行進ニ復ス

第十　後轉回ヲ爲スト同時ニ行進又ハ停止セシムルニハ左ノ號令ヲ下ス

「廻ハレ右前ヘ一進メ」

「廻ハレ右一止レ」

此號令ニテ列員ハ第四章第十三ニ準シテ行動シ欽伍及兩翼嚮導ハ前列ニ就キ列員ハ各自嚮導ニ整頓ス後轉回ヲ爲スト同時ニ行進スル場合ニハ指揮者ハ必要ニ應シ「嚮導左」ノ號令ヲ下スヘシ

方向轉換

第十一　横隊ニ在ル列員ヲシテ方向ヲ轉換セシムルニハ左ノ號令ヲ下ス

「右(左)ニ方向ヲ換ヘ一進メ」

停止間ニ在リテハ右(左)翼嚮導ハ右(左)向ヲ爲ス列員ハ半右(左)向ヲ爲シ歩度ヲ伸シ捷路ヲ經テ漸次新線ニ到リテ停止シ其ノ右(左)隣員ニ整頓ス

速歩行進間ニ在リテハ右(左)嚮導ハ右(左)向ヲ爲シ續テ行進シ

列員ハ前項ニ準シ駈足ニテ新線ニ就キ右(左)隣員ニ準フテ行進ス

少シク方向ヲ轉換セシムルニハ嚮導ニ豫メ新目標ヲ示ス

第十二　横隊ニ在ル列員ヲ側面ニ向カシムルニハ左ノ號令ヲ下ス

「右(左)向ケー右(左)」

此號令ニテ右(左)向ヲ爲シ次ニ偶數員(奇數員)ハ奇數員(偶數員)ノ右(左)ニ出テ四(二)列ニ相竝フ

次ニ側面向ニテ行進ヲ爲サシムルニハ左ノ號令ヲ下ス

「前ヘー進メ」

此號令ニテ行進ヲ起シ各員ハ常ニ左(右)方ニ整頓ス

嚮導ノ後ニアル列員ハ正シク其ノ後ニ就テ行進シ其ノ他ノ列員ハ列中ニ在リテ互ニ重ナリ其ノ直前ニ在ル列員ノ頭ヲ以テ其ノ

前方列員ノ頭ヲ掩フ如ク行進ス

次ニ駈足ヲ以テ側面行進ヲ爲サシムルニハ「駈足ー進メ」ノ號令ヲ下ス

第十三　側面縱隊ニテ停止或ハ行進シアルトキ方向轉換ヲ爲サシムルニハ左ノ號令ヲ下ス

「伍伍左(右)ヘー進メ」

此號令ニテ先頭伍ハ少ナル環形ヲ歩ミ停止間ニ在リテハ前進ヲ起スト同時ニ以上ノ動作ヲ爲シ旋回軸ニ在ル列員ハ最初ノ數歩ヲ縮メ外翼ニ在ル列員ハ正規ノ歩長ヲ以テ行進シ常ニ旋回ノ方ニ整頓シツヽ左(右)ノ方向ヲ換ヘ續キテ行進ス各伍ハ其ノ前ノ伍ト同處ニ到リ同法ヲ以テ方向ヲ轉換ス

少シク方向ヲ轉換セシムルニハ豫メ新目標(方向)ヲ示スヘシ

隊形變換

第十四　停止間ノ側面縱隊ヨリ同方向ニ横隊ヲ作ラシムルニハ左ノ號令ヲ下ス

「左(右)ヘ並ヒ一進メ」

先頭ニ在ル嚮導ハ動クコトナク列員ハ伍ヲ解キ提踏ヲ經テ逐次新線ニ就キ右(左)隣員ニ整頓ス

行進間ニ在リテハ右ノ號令ニテ先頭ニ在ル嚮導ハ足蹈ヲ爲シ列員ハ停止間ノ場合ト同法ヲ以テ新線ニ就キ右(左)隣員ニ準ヒテ足蹈ヲ爲ス次テ「前ヘ進メ」ノ號令ヲ下ス

停止及正面向

第十五　測面行進ニ在ル列員ヲ停止又ハ正面向ヲ爲サシムルニハ左ノ號令ヲ下ス

「全隊ー止レ」

此號令ニテ停止シ動クコトナシ

「左(右)ヘー正面」

此號令ニテ伍ヲ解キ嚮導ニ整頓ス

停止シ直ニ正面ニ向ハシムルニハ左ノ號令ヲ下ス

「左(右)向ケー止レ」

第十六　直行進又ハ測面行進間ニ右(左)向ヲ爲サシムルニハ左ノ號令ヲ下ス

「右(左)向前ヘ—進メ」

此號令ニテ各伍ハ右(左)向ヲ爲シ重複或ハ分解シテ行進ヲ續行ス

第六章　車輛各個教練

第一　指揮者ハ本教練ヲ施行スルニ當リ先ツ各項ニ示ス方法ニ據リ單簡ニ其ノ概要ヲ說明シ自ラ號令シ且ツ實行シテ模範ヲ示スヘシ

第二　指揮者ハ車上喇筒ヲ使用スル爲須要ナル三名ノ使卒ヲ集メ小隊ト爲シ喇筒ノ後方二「メートル」ノ地ニ車ニ面シテ占位セシメ第一伍ハ第一使卒第二伍ハ第二使卒第三伍ハ第三使卒タラシムヘシ但シ第一使卒ハ右方車輪ニ面シ第二使卒ハ搖桿ニ對セシメ第三使卒ハ左方車輪ニ面スヘシ

車頭地ニ在ルトキ喇筒ノ左右ト稱スルハ卽チ車臺ノ後方ニ在リテ喇筒ニ向フ者ノ左右ヲ云フ

各使卒ヲ整頓セシムル爲左ノ號令ヲ下ス

「氣ヲ著ケ」

此ノ號令ニテ各卒不動ノ姿勢ヲ採ル

次ニ左ノ號令ヲ下ス

「番號」

此ノ號令ニテ右翼首位ノ者ヨリ簡單明瞭ニ番號ヲ唱ヘツヽ少シク頭ヲ左ニ振リ順次末尾ニ至ル

持場ニ就カシムル法

第三　使卒ヲ持場ニ就カシムル爲左ノ號令ヲ下ス

「各々持場ヘー進メ」

「進メ」ノ令ニテ第一使卒ハ斜左向ヲ爲シ三歩ニテ車尾ノ左方車輪ノ延線上ニ到リ輪帶ニ面シ之ト三十三「サンチメートル」ヲ距テ占位ス

第二使卒ハ斜左向ヲ爲シ左方車輪ノ延線ヲ通過シ右向ヲ爲シ轅

木ノ左方ニ致リ轅臂ノ中央ニ對シ之ト三「サンチメートル」ヲ距テ前方ニ向テ占位ス

第三使卒ハ右向ヲ爲シ右方車輪ノ延線ヲ通過シテ轅木ノ右轅臂中央ニ對シ第二使卒ト並立ス

車頭ヲ擧クル法

第四　使卒車側ニアルトキ車頭ヲ擧ケシムル爲左ノ號令ヲ下ス

「轅木ヲ擧ケ」

「擧ケ」ノ令ニテ第二第三使卒ハ脚ヲ屈スルヿナク体ヲ俯シ兩掌背ヲ前方ニシ爪ヲ下ニ向ケ轅木ニ近キ手ヲ以テ轅臂ヲ轅木ヨリ八「サンチメートル」ヲ距テ握ル外方ノ手ハ是ヨリ又十「サンチメートル」ヲ隔テ、握リ兩卒体ヲ起シ轅臂ヲ胴締ノ高サ迄ニ擧クヘシ

車頭ヲ地上ニ置ク法

第五　車頭ヲ地上ニ卸サシムル爲左ノ號令ヲ下ス

「轅木置ケ」

「置ケ」ノ令ニ於テ兩使卒ハ前ニ示ス方法ニ從ヒ車頭ヲ地上ニ卸シ兩手ヲ放チ元ノ姿勢ニ復ス

各使卒ヲ車側ヨリ退却セシムル法

第六　使卒ヲ退却セシムル爲左ノ號令ヲ下ス

「小隊車ノ後ヘ一進メ」

「進メ」ノ令ニテ第一使卒ハ八分ノ三右向ヲ爲シ第二ニ示シタル位置ニ到ツハ正面向ヲ爲シ停立ス

第二使卒ハ八分ノ三左向ヲ爲シ喞筒ノ左方(元進ミタル所)ヲ通過シテ第一使卒ノ左方ニ致リ正面向ヲ爲シ右ニ準ヒテ停立ス

第三使卒ハ八分ノ三右向ヲ爲シ喞筒ノ右方(元進ミタル所)ヲ通過シテ第一使卒ノ右脇ヨリ後方ヲ廻リ第二使卒ノ左方ニ列リ正面向ヲ爲シ車輪ニ面シ右ニ準ヒテ停立ス

第七　左ノ教練ヲ授クルニ當リ先ツ第四ニ示ス如ク車頭ヲ擧ケシメ而シテ次ノ運動ヲ施行セシムヘシ

右向ノ法

第八　車上喞筒ヲ右ニ向カシムル爲左ノ號令ヲ下ス

「(一)喞筒右ヘー　(二)進メ　(三)止レ」

第一令ニテ第一使卒ハ右手ヲ以テ水船ノ弧部ヲ握リ第二令ニ於テ第二第三使卒ハ右足ヲ右前ニ進メ右方ニ旋回スヘシ第一使卒モ之ニ從フ第三令ニテ停止シ各卒元ノ姿勢ニ復ス指揮者ハ車上喞筒全ク右方ニ旋回シタルトキ第三令ヲ下スヘシ

左向ノ法

第九　車上喞筒ヲ左ニ向カシムル爲左ノ號令ヲ下ス

「(一)喞筒左ヘー　(二)進メ　(三)止レ」

第一令ニテ第一使卒ハ水船ノ弧部ヲ握リ第二令ニテ第二第三使卒ハ左足ヲ左前ニ進メ左方ニ旋回シ第一使卒モ之ニ從フヘシ第三令ニテ停止シ各卒元ノ姿勢ニ復ス

半右(左)向ノ法

第十　車上喞筒ヲ半右(左)ニ向カシムル爲左ノ號令ヲ下ス

「(一)喞筒半右(左)ヘー　(二)進メ　(三)止レ」

此ノ動作ハ本章第八第九ニ示ス法則ニ從テ施行スヘシ指揮者ハ車上喞筒ノ半右(左)ニ旋回シタルトキ第三令ヲ下スヘシ

後向轉回ノ法

第十一　車上喇筒ニ後向ヲ爲サシムル爲左ノ號令ヲ下ス

「(一)喇筒半輪ニ右ヘー　(二)進メ　(三)止レ」

此ノ動作ハ本章第八ニ示ス法則ニ從テ施行スヘシ指揮者ハ車上喇筒ノ背正面ニ向キタルトキ第三令ヲ下スヘシ

此ノ運動ニ於テ左轉回後向ヲ行フトキハ指揮者ハ左ノ號令ヲ下ス

「(一)喇筒半輪ニ左ヘー　(二)進メ　(三)止レ」

第十二　左ノ教練ヲ授クルニ當リ先ツ第四ニ示ス如ク車頭ヲ擧ケシメ而シテ次ノ運動ヲ施行セシムヘシ

前進法

第十三　車上喇筒ヲ前進セシムル爲左ノ號令ヲ下ス

「(一)喇筒前ヘー　(二)進メ」

第二令ニテ第一使卒ハ右手ヲ以テ水船ノ弧部ヲ握リ第一令ニテ各卒協力シ左足ヨリ進ミ眞直ニ車輛ヲ導クヘシ

方向變換ノ法

第十四　車上喇筒前面ニ行進中側面ノ一方ヘ方向線ヲ變換セシムル爲左ノ號令ヲ下ス

「(一)喇筒右(左)ヘー　(二)進メ　(三)前ヘ」

第二令ニテ各使卒ハ本章第八第九ニ示ス法則ニ從ヒ五歩ノ弓狀ヲ畫シテ右(左)ニ旋回ス但シ外翼ノ使卒ハ歩ヲ延大ニスヘシ第三令ニテ新方向線ニ直行ス

第十五　車上喇筒前面ニ行進中半右(左)ニ向カシムル爲左ノ號令ヲ下ス

「(一)喇筒半右(左)ヘー　(二)進メ　(三)前ヘ」

此ノ動作ハ本章第十ニ示ス法則ニ從テ施行スヘシ

往還行進法

第十六　車上喞筒前面ニ行進中後向行進ヲナサシムル爲左ノ號令ヲ下ス

「(一)喞筒半輪ニ右へー　(二)進メ　(三)前へ」

「進メ」ノ令ニテ第一使卒ハ本章第十三ニ示ス如ク右手ヲ以テ水船ノ弧部ヲ握リ第二令ニテ第二第三使卒ハ斜左向ヲ爲シ約三「メートル」前進シ次ニ右へ二回旋回シ斜右向ヲ爲シ元ノ線ニ復シタルトキハ第三令ヲ下スヘシ此場合ニ於テハ車上喞筒ハ前面ニ直行ス

駐立ノ法

第十七　行進セル車上喞筒ヲ停止セシムル爲左ノ號令ヲ下ス

「(一)喞筒ー(二)止レ」

第二令止レノ號令ニテ各卒停止シ第五ニ示ス姿勢ヲ採ル

退却ノ法

第十八　車上喞筒ヲ退却セシムル爲左ノ號令ヲ下ス

「(一)喞筒後へー　(二)進メ」

第一令ニテ第一使卒ハ車ノ左方ヲ通過シ輪ト轅臂トノ中間喞筒ニ面シ輪ヨリ三十三「サンチメートル」(約一尺九分)距テ占位シ左手ノ爪ヲ下ニ向ケ水船ノ弧部ヲ握ル

第二使卒ハ左足ヲ左前方ヘ右足ノ位置ヨリ六十五「サンチメートル」(約二尺一寸三分)開キ右手ヲ放チ再ヒ轅臂ヲ逆ニ握リ同時ニ右足ヲ左足ニ丁字形ニ接シ左手ヲ放チ右掌中ニ轅臂ヲ滑走シツツ右足尖上ニテ右轉回、後向ヲ爲シ直ニ左足ヲ一歩左方ニ

開キ右足ハ之ニ從フ両手ハ轅臂ヲ其ノ定位ニ就テ握ル

第三使卒ハ第二使卒ノ爲ニ示シタル方法ニ則リ左右反對ノ動作ヲ以テ施行スヘシ

第二令ニ於テ各卒協力シ車上喞筒ヲ眞直ニ退却セシムヘシ

第十九　使卒退却ノ姿勢ニアルトキ前面行進ノ姿勢ヲ採ラシムル爲左ノ號令ヲ下ス

「持場へ」

此ノ號令ニテ各使卒ハ本章第十八ノ方法ニ從ヒ反對ノ動作ヲ以テ定位ニ復スヘシ

第七章　車輛隊列教練

第一　車輛隊列教練ハ二車以上ノ車輛ヲ以テシ各車間ニ三「メートル」(約九尺九寸)ノ間隔ヲ存ス

第二　各車ニ車長一名ヲ置ク車長ハ第一使卒ノ右翼ニ占位ス

第三　番號ハ各車長ノミ之ヲ唱ヘ右ヨリ左ニ唱ヘ送ルモノトス

整　頓

第四　車輛ヲ整頓スルニハ先ツ車長ヲ其ノ整頓線上ニ出ス爲左ノ號令ヲ下ス

「車長何歩前へー進メ」

此ノ號令ニテ各車長ハ指示セラレタル歩數丈前進シ指揮者ハ其ノ位置ヲ正ス

次ニ左ノ號令ヲ下ス

「右(左)へー準へ」

「右(左)へー」ノ豫令ニテ第一第二第三使卒ハ車輛各個教練第三第四ノ法則ニ從ヒ各々持場ヘ進ミタル後車頭ヲ擧ケ前面行進ノ

姿勢ヲ保ツ「進メ」ノ動令ニテ各車一齋ニ前進シ最後ノ一歩ヲ縮メ整頓線ノ後方ニ止マリ各車ノ第二第三使卒ハ頭ヲ右(左)ニ回シ小歩ニテ靜カニ整頓線ニ就ク各車長ハ整頓ヲ正シ之ヲ補助ス

次ニ左ノ號令ヲ下ス

「直レ」

此ノ號令ニテ第二第三使卒ハ頭ヲ正面ニシ第一使卒ハ右手ヲ水船ノ弧部ヨリ離シ垂下ス

横隊行進

第五　横隊ニ在ル車輛ヲ前進セシムル爲左ノ號令ヲ下ス

「前ヘー進メ」

此ノ號令ニテ各車ハ一齋ニ行進ヲ起ス

行進中ハ凡テ左ノ二項ヲ確守スヘキモノトス

一、整頓線ヨリ進ミ或ハ後レ又ハ間隔ヲ失ヒタルトキハ漸次回復スヘキコト

二、整頓翼ヨリ押シ來ルトキハ之ニ從ヒ反對ノ方ヨリ押シ來ルトキハ之ヲ支フルコト

第六　行進ヲ停止セシムル爲左ノ號令ヲ下ス

「全隊ー止レ」

此ノ號令ニテ各車停止シ嚮導ノ方ニ整頓シ頭ヲ正面ニ復ス

第七　斜行進、直行進間ノ方向變換、後正面轉回、駐立其ノ他ノ動作ハ車輛各個教練ニ準シ一齋ニ之ヲ行フ

第八章　喞筒操作教練

第一　喞筒ノ操作ハ疾急且確實ナル取扱ヲ要スルヲ以テ其ノ行動駈足ニ出テ順序ヲ亂スコトナク施行スルヲ目的トスルモ使卒熟

練セサル間ハ速足ヲ以テシ且卸脫方及積載方ヲ數擧動ニ分割敎授スルヲ要ス但シ使卒ノ動作ヲ誤ルモノアルトキハ「止メ」ト令シテ其ノ行動ヲ止メ簡明ニ誤謬ヲ指摘シテ之ヲ正シタル後「始メ」ト令シ運動セシムヘシ

第二　喇筒操作敎練ヲ別チテ甲號喇筒（佛蘭西形）乙號喇筒（獨逸形）ノ二敎トス

第一敎　甲號喇筒之部

第三　指揮者ハ甲號喇筒操作敎練ヲ施行スルニ當リ第六章第二ノ法則ニ依リ三名ノ使卒ヲ集メ定位ニ就カシムヘシ

次ニ左ノ號令ヲ下ス

「氣ヲ著ケ」　第六章第二ノ法則ニ據ル

「番號」　同

五段卸方ノ法

第四　五段卸方ヲ施行セシムル爲左ノ號令ヲ下ス

一「一各〻持場ヘ」　二「進メ」

「進メ」ノ令ニテ各使卒ハ第六章第三ノ法則ニ從ヒ定位ニ就クヘシ次ニ左ノ號令ヲ下ス

二「五段置キ方卸セ」

「卸セ」ノ令ニテ第一使卒ハ車ノ左方ヲ通過シテ車頭ヲ　三「サンチメートル」距テ喇筒ニ面シテ占位ス

第二使卒ハ左向キヲ爲シ車輛ノ延線ヨリ十六「サンチメートル」ヲ距テ鎖匙ニ對シテ占位ス

第三使卒ハ右向キヲ爲シ第二使卒ト相對シ輪ノ延線ヨリ十六「サンチメートル」ヲ距テ占位ス此ノ場合ニ於テハ第一使卒及

第二使卒ハ相互ニ其ノ右方ヲ通過スヘシ

三「鎖ヲ解ケ」

「解ケ」ノ號令ニテ第一使卒ハ左足ヲ一歩前ニ開キ其ノ脚ヲ屈シ右脚ヲ伸シ体ヲ前ニ傾ケ両手ヲ以テ轅木ニ纏著シアル鎖ヲ解キ其ノ中央ヲ臺盤ノ鈎ニ掛ケ而シテ以前ノ姿勢ニ復スヘシ

第二使卒ハ左手ヲ以テ鐶鎖匙ヲ脱シ錠ヲ少シク起立セシメ以テ第三使卒ニ渡シ右足ヲ右前ニ即チ喞筒ノ後方ヘ六十五「サンチメートル」(約二尺一寸三分)ヲ開キ其ノ脚ヲ屈シ左脚ヲ伸シ右手ノ爪ヲ上ニ向ケ梯子ノ第一横木ヲ握リ少シク引出シ左手ノ爪ヲ上ニ向ケ竪木ヲ握リ車ノ下ヨリ引出シ車ノ左方凡二「メートル」(約六尺七寸)ノ地ニ車臺ト並行セシメ釟ヲ車尾ト齋シク置キ而シテ轂ニ對シ輪ノ正中ヨリ十六「サンチメートル」(約五寸三分)ヲ距テ占位ス

第三使卒ハ左手ヲ以テ錠ノ中央ヲ取リ直立セシメ右手ヲ以テ鎖匙ヲ体ノ方ヘ返シ鎖匙ト錠トヲ右手ニ持チ換エ右ニ倒シ其ノ鈎ニ掛ケ而シテ轂ニ對シ輪ノ正中ヨリ十六「サンチメートル」ヲ距テ占位ス

四「轅木ヲ擧ケ」

「擧ケ」ノ令ニテ第一使卒ハ両脚ヲ屈スルコトナク体ヲ俯シ両掌背ヲ前方ニ爲シ爪ヲ下ニ向ケ轅臂ヲ握リ是ヲ胴締ノ高サ迄擧ク蓋シ両拳ノ隔リハ二十「サンチメートル」(約六寸六分)トス

第二第三使卒ハ車頭ノ方ナル手ヲ以テ水船前方ノ弧部ヲ爪ヲ下ニ向ケ握ル他手ハ之ヨリ十「サンチメートル」(約三寸三分)

ヲ距テ握リ同時ニ車尾ノ方ナル足ヲ同方向ニ一歩開クヘシ

五「喞筒卸セ」

「卸セ」ノ令ニテ第一使卒ハ腕ヲ充分ニ伸シ頭上ヘ車頭ヲ擧ケ左手ヲ放チ左足ヲ一歩前ヘ開クト同時ニ（頭ハ轅木ニ向カツテ左ニ傾ケ）左手ヲ「ネーサンスジユ、ウルトワル」上ヘ置キ右手ヲ放チ右足ヲ前ヘ一歩開クト同時ニ右肩ニテ轅木ヲ擔ヒ右手ヲ「タロン」上ニ置キ車臺ノ滑走セサル樣支フヘシ両使卒ハ喞筒ノ覆ラサル樣兩手ヲ以テ支フヘシ

六「車ヲ取レ」

「取レ」ノ令ニテ第一使卒ハ車ヲ二、三「メートル」（約九尺九寸）前進セシメ靜カニ車頭ヲ地上ニ置キ而シテ車ノ右方ヲ通過シ喞筒ノ前方ノ三十三「サンチメートル」（約一尺九分）ヲ距テ

搖桿ニ對シテ占位ス

第二第三使卒ハ喞筒ノ地上ニ到著スルニ從ヒ後方ナル足ヲ前方ノ足ニ引キ著ケ喞筒全ク地上ニ到著セハ両手ヲ放チ第二使卒ハ放口ニ對シ第三使卒ハ吸口ニ對シテ停立ス

四段備方ノ法

第五　喞筒地上ニ在リ使卒ハ各其ノ定位ニ就キタルトキ四段備方ヲ爲サシムル爲左ノ號令ヲ下ス

二「四段備ヘ方備ヘ」

「備ヘ」ノ令ニテ第一使卒ハ両手ヲ以テ（搖桿下ヨリ）吸管ノ結合環ヲ握リ第二第三使卒カ紮帶ヲ解キ吸管端末ニ手ヲ掛ケタルトキ両手ヲ放チ爪ヲ上ニ向ケ両手ニテ吸管ノ中央ヲ握ル

第二使卒ハ右足ヲ右方ヘ五十「サンチメートル」（約一尺六寸

五分）開キ兩手ヲ以テ後部ノ紮帶ヲ解キ再ヒ右足ヲ左足ニ接シ又左足ヲ左方ヘ五十「サンチメートル」（約一尺六寸五分）開キ前部ノ紮帶ヲ解キ吸管ノ端末ヲ右手ノ爪ヲ下ニ向ケ握リ左手ハ右手ヨリ五十「サンチメートル」（約一尺六寸五分）ヲ距テ爪ヲ上ニ向ケ握リ少シク開キ之ヲ頭上ニ擧ケ右ヘ戻スト同時ニ兩足尖ニテ右向ヲ爲シ喞筒ノ後方ヘ進ミ第三使卒ト接近セハ右手ヲ放チ右手ノ爪ヲ上ニ向ケ他ノ一端ヲ第三使卒ヨリ受取リ左手ハ右手ヨリ七十「サンチメートル」（約二尺三寸一分）ヲ距テ爪ヲ上ニ向ケテ握リ第一使卒線上マテ退却シ吸管ヲ一字形ニ爲ス

第三使卒ハ左右反對ノ方法ヲ以テ第二使卒ト同シ動作ヲ爲ス然ル後各卒協力シテ喞筒ノ右方ニ移リ其ノ母螺ヲ吸口ニ對接

セシメテ地上ニ置クヘシ而シテ各卒喞筒ノ右方三十三「サンチメートル」（約一尺九分）ノ地ニ占位ス第一使卒ハ覆冠ニ對シ第二使卒ハ第一使卒ノ左方ニ第三使卒ハ右方ニ在ルヘシ

二「吸管ヲ附ケ」

「附ケ」ノ令ニテ第一使卒ハ右手ヲ以テ「テートタロソワル」ヲ取リ之ヲ第三使卒ニ與エ而シテ吸管ノ母螺ヲ吸口ニ附着セハ喞筒ノ後方三十三「サンチメートル」ヲ距テ占位ス

第二使卒ハ右手ヲ以テ覆冠ヲ取リ吸曲管ニ附着シ第一使卒ノ後方一「メートル」（約三尺三寸）ノ地ニ移リ兩手ノ爪ヲ上ニ向ケ吸管ヲ少シク擧ケ之ヲ吸口ノ高サニ支エ第一使卒ノ吸管ヲ附着スルヲ助ケ然ル後チ喞筒ノ後方ヲ通過シテ放口ニ對シ占位ス而シテ第三使卒本位ニ復セハ前後ノ紮帶ヲ解キ元ノ姿勢

ヲ採ル

第三使卒ハ右手ニ「テートタロソワル」ヲ受取リ吸管ノ端末ニ到リ前面向キヲ爲シ左足ヲ右足ヨリ五十五「サンチメートル」(約一尺八寸)開キ其ノ脚ヲ屈シ右脚ヲ伸シ左手ノ爪ヲ上ニ向ケ吸管ノ端末ヲ取リ其ノ臂ヲ左脚上ニ置キ「テートタロソワル」ヲ附着シ之ヲ水中ニ凡ソ五十「サンチメートル」(約一尺六寸五分)沈マシム而シテ吸口ニ到リ喞筒ニ面シ(吸管ヲ跨リ)占位シ第二使卒ト協力シテ紮帶ヲ解キ元ノ姿勢ヲ採ル

三「管鎗ヲ取レ」

「取レ」ノ令ニテ第一使卒ハ管鎗ヲ取リ体ヲ起シ右手ヲ左手ノ所ニ移シ左手ハ管鎗ノ中央ヲ握リ臂ヲ体ニ接シ拳ヲ左乳ノ前十「サンチメートル」(約三寸三分)下ノ所ニ置キ右拳ハ水管ヲ

握リ髖骨ニ接シ置ク

第二使卒ハ左足ヲ一歩左方ニ開キ体ヲ前方ニ傾ケ木挺ヲ取リ己レノ方ナル重臺ニ並ヘ置キ而シテ左手ヲ以テ搖臂ヨリ水管ヲ外シ両手ヲ以テ水管ヲ箱外ニ出シ本位ニ復シ第三使卒ハ右足ヲ一歩右方ニ開キ木挺ヲ取リ第二使卒ノ置キタル所ニ並ヘ置キ両手ヲ以テ搖臂ヲ壓下シ水管ヲ水船外ニ出シ而テ元ノ姿勢ヲ採ル

四「水管ヲ廣メ」

「廣メ」ノ令ニテ第一使卒ハ消火点ノ方向ニ進ミ位置ヲ占メ「ボワット」ヲ地上ニ置キ管鎗口ヲ上ニ向ケ眞直ニ立チ左手ヲ以テ管鎗端ヲ保持シ右手ヲ放チ自然ニ垂レ頭ハ消火点ノ方ニ向クヘシ

第二使卒ハ第一使卒ノ水管ヲ廣ムルヲ助ケ而シテ水管結合部ヨリ三十三「サンチメートル」(約一尺九分)距テ喞筒ニ面スヘシ

第三使卒ハ兩手ヲ以テ水管ヲ第二使卒ノ方ヘ投シ而テ喞筒ノ後方ニ到リ藍ヲ水船口ニ備ヘ革袋ノ紐ヲ解キ其ノ内ニ存在セル水桶ヲ出シ之ニ水ヲ滿タシ運動ノ妨ケトナラサル所ニ置キ本位ニ復スヘシ

消防法

第六　消防ノ用意ヲ爲サシムル爲左ノ號令ヲ下ス

一「位置ヲ定メ」

「定メ」ノ令ニテ第一使卒ハ左手ヲ以テ管鎗ヲ体ノ中央前十「サンチメートル」(約三寸三分)ノ所ニ上ケ同時ニ右手ノ爪ヲ

上ニ向ケ「ボワット」ヲ握リ髖骨ニ接スルト同時ニ左拳ヲ少シク左方ニ移シ其ノ臂ヲ体ニ接シ其ノ栂指ヲ管口ニ置キ消防点ニ注目スヘシ

第二使卒ハ結合環ヲ附著スルヲ任務トシ常ニ第一使卒ノ號令ヲ第三使卒ニ傳令シ第一使卒ト喞筒ノ中央ニ直立シテ喞筒ニ面ス第三使卒ハ喞筒ノ後方ニ到リ兩手ノ爪ヲ上ニ向ケ搖臂ヲ握リ搖桿ヲ壓下シテ臺盤ニ至ラシメ然ル後喞筒ノ左方ヨリ木挺ヲ挺環ニ備ヘ木挺ノ下ヲ潛リ吸口ニ對シ(吸管ヲ跨ク)停立ス而シテ助手ヲ喞筒ノ前後ニ配置シ相對セシメ其ノ木挺ヲ握ラシムヘシ

二「初メ」

「初メ」ノ號令ニテ第一使卒ハ「初メ」ト復唱シ第一使卒ノ令ニ

テ第二第三使卒モ順次ニ復唱ス第三使卒ノ令ニテ喞筒ノ前後ニ配置セラレタル助手ハ交互搖桿ヲ臺盤ニマテ壓下シ陸續止ムコトナシ

第一使卒ハ助手ノ運動ヲ始ムルトキハ栂指ヲ時々開キ管中ノ空氣ヲ出テサシメ己ニ水ノ管口ニ來ラハ堅固ニ管口ヲ密閉シ其ノ壓力ヲ支フル能ハサル度ニ至ラハ栂指ヲ放ツヘシ

第七　放水ヲ止メシムル爲左ノ號令ヲ下ス

「止メ」

此ノ令ニテ各卒「止メ」ノ號令ヲ前章ノ如ク復唱シ第三使卒ノ令ニテ各助手ハ運動ヲ止ム第一使卒ハ第八章第五第四令水管ヲ廣メノ令ニ示シタル姿勢ヲ採ル

七段解キ方ノ法

第八　備付ケタル喞筒ヲ取崩サシムル爲左ノ號令ヲ下ス

一「七段解キ方崩セ」

「崩セ」ノ令ニテ第一使卒ハ右足ニテ水管ノ端末ヲ踏ミ兩手ヲ以テ管鎗ヲ離脱シ喞筒ノ前方車臺ノ下ニ在ル木挺ト並ヘ置キ喞筒ノ右側ニ到リ吸口ニ面シテ吸管ヲ跨キ占位ス

第三使卒ハ各助手ヲ退却セシメ而シテ放口ニ附著セル水管ヲ離脱シ次ニ木挺及籃ヲ脱シ喞筒ノ前方凡ソ二「メートル」（約六尺六寸）ノ地ニ置キ而シテ喞筒ノ他方ニ到リ「ボワツト」ヨリ二「メートル」ヲ距テ前方ニ面シ兩足尖ハ水管ヨリ三「サンチメートル」（約九尺九寸）ヲ距テ占位ス

第二使卒ハ第一水管ノ結合部ヲ離脱シ第二水管「ボワツト」ヨリ二「メートル」（約六尺六寸）ヲ距テ第三使卒ノ部ニ示ス如キ

姿勢ヲ採ルヘシ

二「水管ノ水ヲ出セ」

「出セ」ノ令ニテ第二第三使卒ハ右手ノ爪ヲ上ニ向ケ水管ヲ「ボワツト」ヨリ二「メートル」距テ握ルト同時ニ左手ヲ充分ニ伸シ同シク水管ヲ握リ之ヲ頭上左右ニ擧ケ管中ノ水ヲ出シ而シテ水管ヲ四折シ其ノ「ボワツト」ヲ放口ニ對シ之ヲ距ル一「メートル」ノ地ニ置キ第二使卒ハ第一使卒ノ左側ニ至リ後鐵把ニ面シ停立ス第三使卒ハ喞筒ノ後方ヲ通過シテ吸管ヲ沈メシ水邊ニ至リ吸管ヲ水中ヨリ引揚ケ其ノ端末ノ所ニ到リ前面向キヲ爲シ吸管ヨリ三「サンチメートル」ヲ距テ占位ス

三「吸管ヲ取レ」

「取レ」ノ令ニテ第一使卒ハ第八章第五第二令吸管ヲ附著シタ

ルトキノ如キ姿勢ヲ採リ之レヲ離脱シ第三使卒ノ助ヲ以テ凡ソ一「メートル」計水管ヲ後方ニ引キタル後喞筒ノ前面ニ到リ之ニ面シテ占位ス

第二使卒ハ右手ヲ以テ覆冠ヲ吸曲管ヨリ脱シ之ヲ吸口ニ附著シ喞筒ノ後方ヲ通過シ放口ニ面シテ停立ス

第三使卒ハ第八章第五第二令ニ於テ吸管ヲ附著セシトキノ如キ姿勢ヲ採リ第一使卒ノ吸口ヲ離脱セハ吸管ヲ索キ凡ソ二「メートル」計リ退却セシメ而シテ「テートタロソワル」ヲ離脱シ之ヲ吸曲管ニ附著シ其ノ儘喞筒ニ面シ第二使卒ト相對シテ占位ス

四「喞筒後ヘ倒セ」

「倒セ」ノ令ニテ各卒協力シテ喞筒ヲ胴締メノ高サ迄扛擧シ第

二使卒ハ右手ヲ左手ト交換セシメ右手ヲ以テ水船弧部（前角ノ處）ヲ握リ兩踵ニテ右廻ヲ爲シ扛擧シナカラ左足ヲ右足前ヘ開キ又右足ヲ重臺ノ後方並ニ脇ヘ十「サンチメートル」ヲ距テ横ニ開キ左向ヲ爲シ左足先ヲ開キ両手兩脚ヲ伸ン前面向ヲ爲シ喞筒ヲ保持スヘシ

第三使卒ハ第二使卒ノ爲メニ示シタル法則ニ從ヒ右左相反スル動作ヲ爲スヘシ

第一使卒ハ兩使卒カ右左ヲ交換シテ右左向ヲナサハ胴締ノ高サ迄扛擧シテ兩手掌ニ支エ兩手ノ指先ヲ上ニ廻シテ握リ小歩ニテ前進シ喞筒ヲ六十五度ニ起立セハ体ヲ後方ニ傾ケ鎖ヲ索キ以テ喞筒ヲ後方ニ覆ヘサラシムルヲ要ス

喞筒全ク起立セハ兩手ヲ放ツヘシ

兩使卒ハ水船ヲ持チタル手ハ其ノ儘ニシテ足ヲ半歩踏ミ出シ喞筒ノ兩側ニ停立スヘシ

五「喞筒洗ヘ」

「洗ヘ」ノ令ニテ第一使卒ハ喞筒ノ左方ヲ通過シ後方ニ到リ喞筒ニ面シ兼テ備ヘシ水桶ノ水ヲ以テ水船中ヲ洗ヒ汚物ヲ去リ兩手ヲ以テ上方ノ挺環ヲ握リ搖桿ヲ眞直ニ爲スヘシ兩使卒ハ水船ヲ持チタル手ヲ放チテ垂下スルト同時ニ踏ミ出シタル足ヲ引キ付クヘシ又第一使卒ノ搖桿ヲ直ストキハ兩使卒ハ更ニ足ヲ以前ノ如ク踏ミ出シ元ノ姿勢ニ復スヘシ

六「喞筒置ケ」

「置ケ」ノ令ニテ第一使卒ハ喞筒ノ左方ヲ通過シ前方ニ來リ重臺ニ面シ鎖ヲ以前ノ如ク握ル兩使卒ハ鉄把ヲ握リシ手ヲ放チ

他手ヲ以テ之ヲ握リ其ノ上方ヨリ元鐵把ヲ握リシ手ノ爪ヲ下ニ向ケ水船縁ヲ採リ各卒協力シテ喞筒ヲ六十五度強ニ迄傾ケ兩使卒ハ水船縁ノ手ヲ放チ同時ニ背面向ヲ爲シ縮歩シテ喞筒ヲ地上ニ安置ス

第一使卒ハ鎖ヲ張リ兩使卒ヲ助ケ喞筒ヲ徐々ニ地上ニ到着セシメ鎖ヲ其ノ鈎ニ掛ケ喞筒ノ左方ニ到リ前方鐵把ニ面シ重臺ヨリ三十三「サンチメートル」距テ占位ス

第二使卒ハ喞筒後方ニ第三使卒ハ前方ニ各重臺ヨリ三十三「サンチメートル」距テ占位ス

七「喞筒ノ水ヲ出セ」

「出セ」ノ令ニテ第一使卒ハ半右向ヲ爲シ右足ヲ一歩後方ニ開キ其ノ脚ヲ伸シ左脚ヲ屈シ体ヲ俯シ左手ノ爪ヲ下ニ向ケ水船

縁ニ置キ右掌ヲ放口ニ固著ス

第二第三使卒ハ第一使卒ノ「止メ」ノ令アル迄交互搖桿ヲ壓下ス第一使卒ハ受器中ノ水全ク出ツレハ右手ヲ放チ「止メ」ト令シ体ヲ起立セシメ右足ヲ左足ノ前ニ三十三「サンチメートル」ノ地ニ進メ其ノ足尖上ニテ半左向ヲ爲シ左足ハ右足ニ接シ放口ニ對シ兩手ノ爪ヲ下ニ向ケ搖桿上ニ置ク而シテ兩使卒ハ喞筒ヲ第一使卒ノ方ヘ傾ケ水船中ノ水ヲ出シ第一使卒ハ放口ヲ地上ニ著ケサラシム爲兩手ヲ以テ之ヲ支フヘシ水全ク出レハ喞筒ヲ元ノ如ク爲シ各卒兩手ヲ放チテ停立ス

四段附方ノ法

第九　諸具ヲ附ケサシムル爲左ノ號令ヲ下ス

一「四段附方附ケ」

「附ケ」ノ令ニテ第一使卒ハ左足ヲ一歩後ニ開キ左手ヲ以テ第一水管ノ端末ヲ採リ右手ヲ以テ其ノ母螺ヲ放口ニ附着ス

第二使卒ハ兩手ニ挺環ヲ握リ搖桿ヲ水平ニ爲シ喞筒ノ右方ヲ通過シ第一使卒ノ左方ニ到リ喞筒ノ後方ニ面シテ占位ス

第三使卒ハ二個ノ籃ヲ採リ搖桿臺ヲ挾ンテ之ヲ水船上ニ置キ喞筒ノ右方ニ到リ第二使卒ト斜ニ對向ス

二「水管ヲ曲ケ」

「曲ケ」ノ令ニテ第一使卒ハ水管ヲ採リ之ヲ第二使卒ニ渡スヘシ第二使卒ハ之ヲ受取リ左手ヲ以テ水管ヲ搖桿ニ掛ケ第三使卒ノ助ケヲ以テ搖桿ノ前端ニ掛ケ次第ニ後方ニ到ラシメ屈曲點ヲ水船中ニ入ルヘシ又第一水管ノ端末ニ至レハ之ヲ右手ニ持チ第一使卒ノ方ニ差出ス

第一使卒ハ第二水管ノ母螺ヲ採テ第一水管ノ螺ニ附着シ前ノ如ク搖桿ニ掛ケ遂ニ搖桿ノ後端ニ終ル又第二水管ノ端末ニ至レハ前ノ如ク右手ニ持チ第一使卒ノ方ヘ差出スヘシ

第一使卒ハ水管ノ屈曲終ラハ喞筒ノ前ニ至リ管鎗ヲ採リ左方ヲ通過シテ後方ニ到リ管鎗ヲ水管ノ螺ニ附着シ第八章第五第三令ノ如キ姿勢ヲ採ルヘシ

第三使卒ハ第二使卒ヲ助ケ水管ヲ曲折シ其ノ曲折部ヲ水船中ニ容レ終ラハ兩使卒ハ喞筒ノ前面ニ到リ車臺ノ下ヨリ木挺ヲ引出シ水船上ニ置キ元ノ位置ニ復シ第一使卒ハ兩使卒ノ木挺ヲ置クト同時ニ左足ヲ一歩後方ニ引キ左手ヲ以テ管鎗ヲ水船上ニ差入レルト同時ニ左足ヲ前方ヘ一歩踏ミ出スヘシ

三「革紐ヲ結ヘ」

「結へ」ノ令ニテ第一使卒ハ右手ハ搖桿上ヨリ左手ハ搖桿下ヨリ水管ヲ押ヘ兩使卒ノ革紐ヲ卷キタルヲ見テ直チニ喞筒ノ左方ヲ通過シテ前方ニ至リ喞筒ニ面シ右手ヲ搖桿ノ下ヨリ左手ヲ搖桿ノ上ヨリ水管ヲ押ヘ兩使卒ノ革紐ヲ卷キ停立セルト同時ニ兩手ヲ放チ吸管ノ中央ニ到リ之ニ面シテ占位ス

第二使卒ハ右足ヲ半歩後方ニ開キ革紐ヲ以テ木挺及水管ヲ卷キ右足ヲ左足ニ接シ更ラニ左足ヲ半歩左方ニ開キ革紐ヲ前ノ方法ニテ卷キ終ラハ左手ノ爪ヲ上ニ向ケ卷キタル革紐ノ本ヲ握リ右手ノ爪ヲ下ニ向ケ端末ヲ握リテ喞筒ノ後方ニ面シテ起立シ直チニ兩手ヲ放チテ喞筒ノ前方ヲ通過シ吸管ノ右端末ニ至リ吸管ニ面シテ占位ス

第三使卒ハ第二使卒ニ示ス如キ方法ニ依リ左右反對ノ動作ヲ

ナシ吸管ノ左端末ニ至リテ占位ス

四「吸管ヲ曲ケ」

「曲ケ」ノ令ニテ各使卒共ニ第八章第五第一令四段備ヘ方備ヘノ方法ニ從ヒ反對ノ動作ヲ以テ吸管ヲ水船上ニ備ヘ紮帶ヲ以テ堅固ニ紮着ス但シ第一使卒ハ兩使卒ガ吸管ノ端末ヲ持チ來ルヲ待チ兩手ニテ其ノ兩端ヲ支フヘシ兩使卒ハ前後共紮着セハ第三使卒ハ後方第二使卒ハ前方ナル紮帶ノ瑞末ヲ採リ同時ニ强ク引キ堅固ニ紮直スヘシ此時第一使卒ハ兩手ヲ挺環ニ置キ搖桿ヲ水平ニ爲ス而シテ各卒其ノ末位ニ復シ停立ス

七段積方ノ法

第十　七段積ミ方ヲ施行スル爲左ノ號令ス

一「七段積ミ方積メ」

「積メ」ノ令ニテ第一使卒ハ右手ヲ以テ鎖ヲ鈎ヨリ脱シ兩脚ヲ伸シ体ヲ俯シ兩足ヲ少シク進メ右手ノ栂指ヲ下ニ向ケ鎖ノ大環ニ接シ之ヲ握リ左手ハ右手ノ上三「サンチメートル」ノ處ヲ握ルヘシ

第二第三使卒ハ各其前方ヘ向キ第一使卒ニ面シ体ヲ前方ニ屈シ両踵ヲ接シ両脚ヲ伸シ喞筒ノ方ナル手ノ爪ヲ上ニ向ケ鉄把ヲ握ルヘシ

二「喞筒擧ケ」

「擧ケ」ノ令ニテ各卒協力シテ喞筒ヲ胴締ノ高サ迄扛擧シ第二使卒ハ右手ヲ左手ト交換セシメ同時ニ右轉回後向キヲ爲シ右足ヲ一歩前ニ開キ右手ヲ以テ水船ヲ握リ右脚ヲ屈シ左足ヲ伸シ各卒協力シテ喞筒ヲ六十五度強ニ迄起立セシメ両足尖上ニ

テ左轉回後向キヲ爲シ右脚ヲ屈シ左脚ヲ伸シ成丈左足ヲ左方ニ開キ両手ヲ以テ喞筒ヲ保持スヘシ

第三使卒ハ第二使卒ノ爲ニ示ス方法ニヨリ左右相反スル動作ヲ爲スヘシ

第一使卒ハ両使卒ノ両手ヲ交換シテ後向キヲ爲サハ鎖ヲ重臺ノ上ニ投シ兩手ヲ以テ重臺ノ端末ヲ握リ協力シテ喞筒ヲ六十五度強ニ迄起立セシメ之ヲ兩使卒ニ托スヘシ

三「車ヲ付ケ」

「付ケ」ノ令ニテ第一使卒ハ車臺ノ右方ヲ通過シ車頭ノ前方ニ到リ第八章第四ニ示ス如ク轅木ヲ擧ケ車臺ヲ退却セシメ挿板間ニ重臺ノ嵌入スヘキ度ヲ計リ車臺ヲ重臺ノ下ニ置キ右足尖ニテ車軸ヲ踏ミ轅木ヲ右肩ニ荷ヒ左手ヲ「ネーサンス、ジュ、

ウルトワル」ニ置キ右手ヲ「タロン」ニ置クヘシ

四「喞筒置ケ」

「置ケ」ノ令ニテ第二第三使卒ハ重臺ヲ挿板間ニ嵌入セシメ第二使卒ハ右手ヲ以テ前鎖ヲ採リ之ヲ第一使卒ニ與フ第一使卒ハ之ヲ張リ轅鈎ニ掛ケ其ノ餘端ヲ轅木ニ卷付ケ一歩退キ右手ニテ轅臂ヲ握ル

第二使卒ハ両手ヲ放チ左足ヲ右足ニ接シ左向キヲ爲シ兩脚ヲ伸シ体ヲ俯シ右手ノ爪ヲ上ニ向ケ後方ノ鉄把ヲ握リ左手ノ爪ヲ体ノ方ヘ向ケ輪ノ一輻ヲ握ルヘシ

第三使卒ハ第二使卒ノ爲ニ示ス動作ヲ左右反對ノ方法ヲ以テ施行スヘシ

五「轅木ヲ卸セ」

「卸セ」ノ令ニテ第一使卒ハ右足ヲ車臺端ニ掛ケ左足ヲ地上ヨリ離シ体ノ重ミヲ轅臂ニ托シ車頭ヲ胴締ノ高サ迄ニ降下スヘシ

第二第三使卒ハ協力シ同時ニ喞筒ノ後部ヲ扛擧シ而シテ第二使卒ハ車ノ左方ヲ通過シテ輪ト轅臂トノ間ニ到リ轅木ニ面シ右手ノ爪ヲ上ニ向ケ「タロン」ト「ネーサンス、ジュ、ウルトワル」ノ間ニ於テ前鎖ヲ握ル

第三使卒ハ喞筒ノ後方ニ到リ車尾ニ面シ兩手ノ拇指ヲ下ニシテ重臺端ニ置クヘシ

六「轅木ヲ置ケ」

「置ケ」ノ令ニテ第一使卒ハ靜カニ車頭ヲ地上ニ卸シ左足尖ニテ車頭ヲ支フヘシ

第二使卒ハ左足ヲ一歩左方ニ開キ其ノ脚ヲ伸シ右脚ヲ屈シ鎖ヲ強ク索ク

第三使卒ハ右足ヲ一歩後方ニ開キ其ノ脚ヲ伸シ左脚ヲ屈シ重臺ヲ押壓シ而シテ後各卒其ノ位地ニ停立ス

七「鎖ヲ結ヘ」

「結ヘ」ノ令ニテ第三使卒ハ車臺ノ右方錠ニ移リ車臺ニ面シ之ヲ距ル三十三「サンチメートル」ノ所ニ占位スヘシ

第二使卒ハ梯子ノ左方ニ到リ本章第四鎖ヲ解ケノ令ニ於テ取除ケシトキノ如ク梯子ヲ保持シ之ヲ車臺ノ下ニ差入レ其ノ釟ヲ車臺端ニ掛ケ而シテ第三使卒ヨリ錠ヲ受取リ之ヲ固着シ第三使卒ハ本章第四鎖ヲ解ケノ令ニ於テ錠ヲ受ケシトキト反對ノ動作ヲ以テ錠ヲ第二使卒ニ渡スヘシ

第一使卒ハ左足ヲ一歩前ヘ開キ本章鎖ヲ解ケノ令ニ於テ示シタルトキト反對ノ動作ヲ以テ梯子ヲ結着スヘシ

第十一　各使卒ヲ舊位ニ復セシメント欲セハ左ノ號令ヲ下ス

「持場ヘ」

此ノ令ニテ第一使卒ハ右向ヲ爲シ左足ヲ轅臂端末外ニ開キ左向ヲ爲シ喞筒ノ左方ヲ通過シテ後方ニ到リ左廻ヲ爲シ左車輛ニ面シ之ト三十三「サンチメートル」ヲ距テ占位ス

第二使卒ハ左向ヲ爲シ喞筒ノ左方ヲ通過シテ轅木ノ左方轅臂ノ中央ニ對シ占位ス

第三使卒ハ右向ヲ爲シ喞筒ノ右方ヲ通過シテ轅木ノ右轅臂中央ニ對シ占位ス

使卒ヲ車側ヨリ退却セシムル法

第十二　使卒ヲ車側ヨリ退却セシムル爲左ノ號令ヲ下ス

「小隊車ノ後ヘ一進メ」

此ノ令ニテ各使卒ハ第六章第六ニ示シタル動作ヲ施行スヘシ

甲號喞筒（佛蘭西形）急キ取扱ノ法

第十三　急キ取扱方ヲ施行スル爲メ左ノ號令ヲ下ス

但シ各卒持場ニ在ルトキ施行スヘシ

「急キ取扱方カ、レ」

此ノ號令ニテ各卒ハ第八章第四ニ示ス法則ヲ亂スコトナク疾急ニ施行スヘシ

「備ヘ」

此ノ號令ニテ各卒ハ第八章第五ニ示ス動作ヲ疾急ニ施行スヘシ

「初メ」

此ノ號令ニテ各卒ハ第八章第六ニ示ス動作ヲ疾急ニ施行スヘシ

「止メ」

此ノ號令ニテ各卒ハ第八章第七ニ示ス動作ヲ疾急ニ施行スヘシ

「崩セ」

此ノ號令ニテ各卒ハ第八章第八ニ示ス動作ヲ疾急ニ施行スヘシ

「付ケ」

此ノ號令ニテ各卒ハ第八章第九ニ示ス動作ヲ疾急ニ施行スヘシ

「積メ」

此ノ號令ニテ各卒ハ第八章第十ニ示ス動作ヲ疾急ニ施行スヘシ

各使卒ヲ舊位ニ復セシメント欲セハ左ノ號令ヲ下ス

「持場ヘ」 第八章第十一ノ法則ニ據ル

「小隊車ノ後ヘ進メ」第八章第十二法則ニ據ル

第二敎　乙號喞筒之部

第十四　指揮者ハ乙號喞筒操作敎練ヲ施行スルニ當リ第六章第二ノ法則ニ據リ三名ノ使卒ヲ集合シ定位ニ就カシムヘシ

次ニ左ノ號令ヲ下ス

「氣ヲ著ケ」 第六章第二ノ法則ニ據ル

「番號」　同

車側ニ入ラシムル法

第十五　各使卒ヲ車側ニ入ラシムル爲左ノ號令ヲ下ス

(一)「各々持場ヘ」　(二)「進メ」

「進メ」ノ令ニ於テ各使卒ハ第六章第三ノ法則ニ從ヒ定位ニ就クヘシ

四段置方ノ法

第十六　四段取扱方ヲ施行セシムル爲左ノ號令ヲ下ス

一「四段置キ方卸セ」

「卸セ」ノ令ニテ第一使卒ハ右向ヲ爲シ右方車輛ノ延線ヲ通過セハ左向ヲ爲シ車輛ノ延線ヨリ十六「サンチメートル」距テ前鐵把ニ對シテ占位ス

第二使卒ハ左轉回ヲ爲シ車輛ノ延線ヨリ十六「サンチメート

ル」距テ後鐵把ニ對シテ占位ス

第三使卒ハ右轉回ヲ爲シ第二使卒ニ相對シ車輪ノ延線ヨリ十六「サンチメートル」ヲ距テ後鐵把ニ對シ占位ス

此ノ場合ニ於テハ第一使卒及第三使卒ハ相互ニ其ノ右方ヲ通過スヘシ

二「吸水管ヲ卸セ」

「卸セ」ノ令ニテ第一使卒ハ吸管ノ第一紮帶ヲ解キ直ニ左足ヲ左方ニ一歩開キ第二ノ紮帶ヲ解キ直チニ左足ヲ右足ニ接シ右手ノ爪ヲ上ニ向ケ左手ノ爪ヲ下ニ向ケ吸管ノ端末ヲ握リ吸管掛ケヨリ卸シ左足ヲ左方ヘ開キ車輛ヨリ三「サンチメートル」ヲ距テ母螺ヲ吸口ニ對シテ地上ニ置キ左足ヲ右足ニ接シ第二吸管ヲモ同樣ノ順序ヲ以テ取卸シ左後方ヘ横行シテ第一吸管

ノ牡螺ノ右脇ヘ十六「サンチメートル」ヲ合セ一字形ニ置キ第三吸管ハ右手ノ爪ヲ上ニ向ケ左手ノ爪ヲ下ニ向ケ握リ吸管ノ後方ヘ進ミ是モ一字形ニ爲シ而シテ前方轅木ニ至リ喞筒ニ面シ轅臂ヲ後ロニシテ距ルコト三「サンチメートル」轅木ヲ右脇ニシテ距ルコトモ三「サンチメートル」ニシテ踵ヲ接シテ占位ス

第三便卒ハ右足ヲ右方ヘ一歩開キ吸管ノ第三紮帶ヲ解キ右足ヲ左足ニ接シ第四ノ紮帶ヲ解キ右手ノ爪ヲ下ニ向ケ左手ノ爪ヲ上ニ向ケテ吸管ノ端末ヲ握リ採リ卸シ第二第三ノ吸管モ同樣ノ手續ヲ以テ採卸シ然シテ轂ニ對シ輪ノ正中ヨリ十六「サンチメートル」ヲ距テ占位ス

第二使卒ハ車尾ニ到リ函中ヨリ螺旋廻及水管管鎗ヲ出シ之ヲ

喞筒ノ左方前鐵把ヨリ一「メートル」距テ地上ニ置キ而シテ前方ノ輛帶ニ面シ同線ヨリ三十三「サンチメートル」距テ直立シ右手ノ爪ヲ上ニ向ケ木挺ノ金物ニ接シテ之ヲ握リ左手ノ爪ヲ下ニ向ケ木挺ノ端末ヲ握リ同時ニ右足ヲ一歩右ニ開キ之ヲ卸シ水管ト並ヘテ横ニ地上ニ置キ兩足ヲ崩サスシテ次ノ木挺モ先キト同一ニ採リ卸シ而シテ轂ニ對シ輪ノ正中ヨリ十六「サンチメートル」距テ占位ス

三「喞筒卸セ」

「卸セ」ノ令ニテ第一使卒ハ左足ヲ八十五「サンチメートル」前ヘ進メ右手ヲ以テ鐵栓ノ頭ヲ持チ左手ハ其ノ末ヲ持チテ之ヲ拔キ而シテ左手ハ轅鈎ニ接シテ爪ヲ下ニ向ケ「ネーサンス」ニ置キ右手ハ爪ヲ上ニ向ケ轅木ヲ握リ靜カニ車頭ヲ擧ゲテ車尾

ヲ地上ニ卸スト同時ニ右足ヲ一歩前ニ開キナカラ轅木ヲ右肩ニ擔ヒ右手ヲ左手ニ接シテ「ネーサンス」ニ置キ以テ車臺ヲ維持ス

第二第三使卒ハ車頭ノ方ナル手ヲ以テ水船ノ前方弧部ヲ爪ヲ下ニ向ケテ握リ同時ニ車尾ノ方ナル足ヲ同方ヘ一歩開キ喞筒ノ覆ラサル樣支フヘシ

四「車ヲ取レ」

「取レ」ノ令ニテ第一使卒ハ車ヲ一、二「メートル」前進セシメ靜カニ車頭ヲ地上ニ置キ而シテ車ノ右方ヲ通過シ喞筒ノ前三十三「サンチメートル」ヲ距テ搖桿ニ對シテ占位ス

第二第三使卒ハ喞筒ノ地上ニ到着セハ兩手ヲ放チ第二使卒ハ放口ニ對シ第三使卒ハ吸口ニ對シテ占位ス

第十七　喞筒地上ニ使卒其ノ定位ニ在ルトキ三段備方ヲ爲サシムル爲左ノ號令ヲ下ス

一「三段備方備ヘ」

「備ヘ」ノ令ニテ第一使卒ハ喞筒ノ右方ニ到リ吸口ニ對シ占位ス第二使卒ハ二個ノ螺旋廻ヲ持チ來リ一箇ハ第一使卒ニ渡シ一箇ハ自身ニ携帶シ舊位ニ復ス

第三使卒ハ左ニ一歩開キ第一使卒ト竝立シテ占位ス

二「吸管ヲ付ケ」

「付ケ」ノ令ニテ第一使卒ハ吸管ノ母螺ヲ吸口ニ附著シ第二第三ノ吸管モ母螺ヲ握リ順次接續ス而シテ喞筒ノ前方ヲ通過シ管鎗ヲ採リテ水管ノ牡螺ニ附著シ之ヲ左手ニ持チ消防点ニ向ヒ直立スヘシ

第三使卒ハ第一使卒ノ後方ニ至リ兩手ヲ以テ吸管ヲ少シク擧ケ吸口ノ高サニ爲シ第一使卒ノ之ヲ附著スルヲ助ケ又第一第二ノ吸管ノ端末ノ螺ヲ握リテ同シク附著スルヲ助ケ而シテ塵除ヲ水中ニ凡ソ五十「サンチメートル」沈マシメ吸口ニ對シテ占位ス

第二使卒ハ第一水管ヲ放口ニ附著シ又第一水管ト第二水管ノ結合環ヲ接續シ而シテ水管端ノ牡螺ヲ兩手ヲ以テ握リ第一使卒ノ方ヘ向ケ管鎗ヲ附着セシム

此場合ニ於テ第一使卒及第三使卒ハ共ニ右轉回ヲ爲シテ吸管ヲ接續スヘシ

三「水管ヲ廣メ」

「廣メ」ノ令ニ於テ第一使卒ハ消防点ニ向ヒ進行シ位地ヲ正面

ニ占メ「ホワツト」ヲ地上ニ置キ左手ヲ以テ管鎗先ヲ握リ右手ハ自然ニ垂レ頭ハ消防点ニ向フヘシ

第二使卒ハ第一使卒ノ水管ヲ延長スルヲ助ケ而シテ水管ノ結合部ヨリ三十三「サンチメートル」ヲ距テ喞筒ニ面スヘシ

第三使卒ハ其ノ儘停立ス

第十八　各卒ニ消防ノ用意ヲ爲サシムル爲左ノ號令ヲ下ス

「位地ヲ定メ」

「定メ」ノ令ニテ第一使卒ハ左手ヲ以テ管鎗ヲ体ノ中央前十「サンチメートル」ノ所ニ擧ク同時ニ右手ノ爪ヲ下ニ向ケ「ポワツト」ヲ握リ髖骨ニ接ス同時ニ左拳ヲ少シク左方ニ移シ其ノ臂ヲ体ニ接シ其ノ栂指ヲ管口ニ置キ右足ヲ後方ヘ一歩開キ消防点ニ注目スヘシ

第二使卒ハ結合環ヲ附著シ常ニ第一使卒ノ號令ヲ第三使卒ニ傳令シ第一使卒ト喞筒トノ中央ニ直立シテ喞筒ニ面ス

第三使卒ハ喞筒ノ後方ニ至リ搖桿ヲ壓下シ木挺ヲ採テ挺環ニ備ヘ而シテ助手ヲ前後ニ配置シ木挺ヲ握ラシム

第十九　消防点ニ放水セシメントスルトキハ左ノ號令ヲ下ス

「初メ」

此ノ令ニテ第一使卒ハ「初メ」ト復唱ス第一使卒ノ令ニテ第二第三使卒モ順次ニ復唱ス

第三使卒ノ令ニテ喞筒ノ前後ニ配置セル助手ニ運轉セシム

第一使卒ハ助手ノ運轉ヲ初ムルトキ栂指ヲ開キ時々空氣ヲ出シ水ノ管口ニ來ラハ堅ク閉チ支フル能ハサルニ致テ栂指ヲ放ツヘシ

第二十　放水ヲ止メシムル爲左ノ號令ヲ下ス

「止メ」

「止メ」ノ令ニテ各卒ハ止メト復習シ助手ノ運轉ヲ止ムヘシ

第一使卒ハ第八章第十七水管ヲ廣メノ令ニ於テ示シタル如キ姿勢ヲ採ルヘシ

第二十一　備付タル喞筒ヲ取崩サシムル爲左ノ號令ヲ下ス

「三段解キ方崩セ」

「崩セ」ノ令ニテ第一使卒ハ右足ニテ水管ノ端末ヲ踏ミ両手ヲ以テ管鎗ヲ離脱シ喞筒ノ左方ニアル木挺ト並ヘ置キ喞筒ノ前ヲ通過シテ右方ニ到リ吸口ニ對シ占位ス

第二使卒ハ水管ノ結合部ヲ離脱シ第二水管ノ「ホワツト」ヨリ「メートル」ヲ距テ吸管ニ面シテ占位ス

第三使卒ハ各助手ヲ退却セシメ而シテ放口ニ附著セル水管ヲ離脱シ放口ヨリ「メートル」隔テ地上ニ置キ次ニ木挺ヲ脱シ喞筒ノ左方「メートル」ノ地ニ置キ而シテ第一水管ノ「ボワツト」ヨリ「メートル」ヲ距テ水管ニ面シテ占位ス

「水管ノ水ヲ出セ」

「出セ」ノ令ニテ第二第三使卒ハ右手ノ爪ヲ上ニ向ケ水管ヲ「ボワツト」ヨリ「メートル」ヲ距テ握リ同時ニ左手ヲ充分ニ伸シ水管ヲ握リ頭上右左ニ擧ケ両手ヲ交換シツヽ横歩シテ水管ノ水ヲ出シ而シテ成ルヘク地上ヲ引カサル樣六折又ハ八折シテ喞筒ノ左方「メートル」ノ地ニ木挺ト並ヘ置キ第二使卒ハ放口ニ對シテ占位シ第三使卒ハ喞筒ノ後方ヲ通過シ吸管ヲ沈メシ水邊ニ至リ塵除ヲ水中ヨリ引上ケ其ノ端末ニ正面向ヲ

爲シ占位ス

三「吸管ヲ取レ」

「取レ」ノ令ニ於テ第一使卒ハ吸口ヨリ吸管ヲ離脱シ而シテ第八章第十七第二令吸管ヲ附ケシトキノ法則ヲ以テ第二第三吸管ノ結合部ヲ離脱シ之ヲ第一吸管ト同所ニ纏メ置キ而シテ喞筒ノ前面三十三「サンチメートル」ノ地ニ至リ搖桿ニ對シテ占位ス

第三使卒ハ第一使卒カ吸管ヲ脱セシヲ見ハ之ヲ引キテ一「メートル」計ヲ退却セシメ而シテ第八章第十七吸管ヲ附ケシトキノ手續ヲ以テ第一使卒ヲ助ケテ結合部ヲ離脱シ之ヲ同所ニ纏メ置キ吸口ニ對シテ占位ス

六段積ミ方ノ法

第二十二　六段積ミ方ヲ施行セシムル爲左ノ號令ヲ下ス

一「六段積ミ方積メ」

「積メ」ノ令ニテ第一使卒ハ喞筒重臺ノ鐵環ヲ兩手ノ爪ヲ上ニシテ握リ第二第三使卒ハ各其ノ方ノ前鐵把ノ高サニ就テ第一使卒ニ面シ体ヲ屈シ兩踵ヲ接シ両脚ヲ伸シ喞筒ノ方ナル手ノ爪ヲ上ニ向ケテ鐵把ヲ握ルヘシ

二「喞筒擧ケ」

「擧ケ」ノ令ニテ各卒協力シテ喞筒ヲ胴締ノ高サ迄扛擧シ第二使卒ハ右手ヲ左手ト交換セシメ同時ニ右轉回、後向ヲ爲シ左足ヲ一歩前ニ開キ右手ヲ以テ水船ヲ握リ右脚ヲ屈シ左脚ヲ伸シ各卒協力シテ喞筒ヲ六十五度强ニマテ起立セシメ兩足尖上ニモ左轉回後向ヲ爲シ右脚ヲ屈シ左脚ヲ伸シ成ルヘク左足ヲ

左方ニ開キ両手ヲ以テ喞筒ヲ保持スヘシ

第三使卒ハ第二使卒ノ爲ニ示ス方法ニ從ヒ左右相反スル動作ヲ爲スヘシ

第一使卒ハ両使卒ノ両手ヲ交換シテ後向ヲ爲サハ両手ヲ以テ重臺ノ端末ヲ握リ協力シテ喞筒ヲ六十五度强ニ迄起立セシメ之ヲ両使卒ニ托スヘシ

三「車ヲ付ケ」

「付ケ」ノ令ニテ第一使卒ハ車臺ノ右方ヲ通過シテ車頭ノ前方ニ到リ両掌背ヲ前方ニシテ爪ヲ下ニ向ケ轅臂ヲ握リ是ヲ胴締ノ高サ迄ニ擧ケ車臺ヲ退却セシメ挿板間ニ重臺ノ嵌入スヘキ度ヲ計リ車臺ヲ重臺ノ下ニ置キ右足一歩前ニ開キ轅木ヲ右肩ニ擔ヒ左手ヲ轅鈎ニ接シテ「ネーサンス」ニ置キ右手ハ左手ニ

接シテ「ネーサンス」ニ置キ以テ車臺ヲ維持ス

四「喞筒置ケ」

「置ケ」ノ令ニ於テ第二第三使卒ハ重臺ヲ挿板間ニ嵌入セシムヘシ第二使卒ハ両手ヲ放チ左足ヲ右足ニ接シ正面向ヲ爲シ両脚ヲ伸シ体ヲ俯シ右手ノ爪ヲ上ニ向ケ後方ノ鐵把ヲ握リ左手ノ爪ヲ下ニ向ケテ輪ノ一輻ヲ握ルヘシ第三使卒ハ第二使卒ノ爲ニ示ス動作ヲ左右反對ノ方法ヲ以テ施行スヘシ

五「轅木卸セ」

「卸セ」ノ令ニ於テ第一使卒ハ右手ヲ放チ右足ヲ左足踵ヨリ八十五「サンチメートル」後方ヘ開キ右手ノ爪ヲ下ニ向ケ轅木ヲ握リ之ヲ壓下シ両足踵ニテ左向ヲ爲シ右手ヲ以テ鐵栓ヲ挿入シ第八章第廿二第二令末文ノ姿勢ヲ採ル第二第三使卒ハ協力

シテ同時ニ喞筒ノ後部ヲ扛擧シ而シテ第二使卒ハ右足ヲ右斜ニ後方ヘ第三使卒ハ左足ヲ左斜ニ後方ヘ一歩開キ両手ヲ以テ重臺ヲ押壓シ而シテ第八章第十六第一令ニ示ス如ク後鉄把ニ對シテ占位ス

六「吸水管ヲ積メ」

「積メ」ノ令ニテ第一使卒ハ第三使卒ノ塵除ケノ方ナル端末ヲ右手ノ爪ヲ下ニ向ケ左手ノ爪ヲ上ニ向ケテ之ヲ握リ車上ニ積ミ第二第一ノ吸筒ハ喞吸ノ方ナル端末ヲ右手ノ爪ヲ上ニ向ケ左手ノ爪ヲ下ニ向ケテ採リ之ヲ積ミ而シテ取リ卸セシトキト同樣ノ動作ヲ以テ紮帶ヲ締メ自己ノ携帶セル螺旋廻ヲ第三使卒ニ渡シ前鉄把ニ對シ占位ス

第三使卒ハ第三吸管ノ母螺ノ方ナル端末ヲ右手ノ爪ヲ下ニ向

ケ左手ノ爪ヲ上ニ向ケテ握リ之ヲ車上ニ積ミ第二第一ノ吸管ハ牡螺ノ方ナル端末ヲ右手ノ爪ヲ上ニ向ケ左手ノ爪ヲ下ニ向ケテ採リ之ヲ積ミ而シテ取卸セシトキト同樣ノ動作ヲ以テ紮帶ヲ締メ第一使卒ヨリ受取リタル螺旋廻ヲ第二使卒ニ渡シ後鐵把ニ對シテ占位ス

第二使卒ハ木挺ノ端末ニ到リ後方ニ向ヒ踵ヲ接シテ直立シ右手ノ爪ヲ上ニ向ケ木挺ノ鐵物ニ接シテ之ヲ握リ左手ハ爪ヲ下ニ向ケテ其ノ端ヲ握リ左足ヲ左方ヘ一歩開キ之ヲ車上ニ積ミ其ノ両足ヲ崩サスシテ又次ノ木挺モ同樣ノ法則ニ據リ採リテ之ヲ積ミ而シテ管鎗ヲ取リ車尾ニ至リ自己ノ携帶セル螺旋廻及第三使卒ヨリ請取リタル螺旋廻ト共ニ函中ニ納メ而シテ後鐵把ニ對シ占位ス

第二十三　各使卒ヲ本位ニ復サシムルカ爲左ノ號令ヲ下ス

「持場へ」

此ノ令ニテ各卒ハ第八章第十六第一令ニ示シタル法則ニ相反スル動作ヲ以テ其ノ定位ニ復スヘシ

使卒ヲ退却セシムル法

第二十四　使卒ヲ車側ヨリ退却セシムル爲左ノ號令ヲ下ス

「小隊車ノ後へ進メ」

此ノ動作ハ第八章第十二甲號喞筒操作敎練ノ令ニ同ジ

乙號喞筒（獨逸形）急キ取扱法

第二十五　急キ取扱方ヲ施行スル爲左ノ號令ヲ下ス但シ各卒持場ニ在ルトキ施行スヘシ

「急キ取扱方カヽレ」

此ノ號令ニテ各卒第八章第十六ニ示ス法則ヲ亂スコトナク疾急ニ施行スヘシ

「備へ」

此ノ號令ニテ各卒第八章第十七ニ示ス動作ヲ疾急ニ施行スヘシ

「初メ」

此ノ號令ニテ各卒第八章第十九ニ示ス動作ヲ疾急ニ施行スヘシ

「止メ」

此ノ號令ニテ各卒第八章第廿二ニ示ス動作ヲ疾急ニ施行スヘシ

「崩セ」

此ノ號令ニテ各卒第八章第廿一ニ示ス動作ヲ疾急ニ施行スヘシ

「積メ」

此ノ號令ニテ各卒第八章第廿二ニ示ス動作ヲ疾急ニ施行スヘシ

第廿六　各使卒ヲ舊位ニ復セシメント欲セハ左ノ號令ヲ下ス

「持場ヘ」第八章第廿三ノ法則ニ據ル

次ニ左ノ號令ヲ下ス

「小隊車ノ後ヘ進メ」

此ノ號令ニテ各卒ハ第八章第廿四ニ示ス動作ヲ施行スヘシ

第九章　喞筒保存法

第一　喞筒ハ不熟練者ヲシテ猥リニ全部ヲ解剖セシムヘカラス若

シ不得止解剖スルトキハ豫メ螺旋其ノ他ノ接合部ニハ總テ符合ヲ附シ置キ最初ト毫モ違背セサル樣組ミ立ツヘシ捻ノ締加減等亦然リ

第二　喞筒中ニ在テ常ニ磨滅シ易ク充分注意スルニ非サレハ遂ニ喞筒一部ノ改造ヲ要スルカ如キ損傷ヲ生シ易キハ殊ニ圓筒ト喞子トノ磨擦關係ニ於ケル衛帶ナリトス卽チ眞鍮製双方ノ圓筒内ニ在テ使用毎ニ必ス昇降スル喞子ノ中央周圍ニ裝著ケタル衛帶(揉麻ヲ用ヒタルヲ常例トス稀ニハ皮製モアリ)喞子ヲ引出サザレハ見ヘス)ハ金屬ト金屬ト狹間ニ介在シテ双方ノ磨損ヲ防衛スルノ要具タルト共ニ金屬相互ノ僅隙ヲ愼充シテ空氣ノ侵入ヲ防キイ(吸水作用ヲ補助シロ漏水ヲ防禦スルノ働等ヲ併有シ不可欠ノ要具タルヲ以テ常ニ左ノ注意ヲ要ス

（甲）使用後ハ勿論喞子ヲ底ニ押下ケ糸屑類ヲ以テ圓筒内ヲ清掃シ油ヲ注キ置キ砂塵ノ侵入ヲ嚴防スヘシ平素ニ於テモ常ニ清潔ナラシメ時々油ヲ注キ置クヘシ

（乙）使用前ニハ先ツ油ヲ注クヲ要ス使用中ニ在テモ時々注油シ喞子ノ輕滑ヲ計リ可成砂塵ノ侵入ヲ防クヘシ

喞子衛帶ノ磨滅セシヲモ顧ミスシテ使用スルヲ各地方ノ常弊ナリトス此ノ如キハ逐ニ使用不能ニ陷ルノ原由タルヲ以テ常ニ衛帶ノ如何ニハ充分ノ注意ヲ拂ハサルヘカラス

衛帶磨滅スレハ喞子ノ昇降自然輕易トナリ喞子ノ周圍ヨリ水ヲ漏田ス（微小ノ漏水ハ未タ介意スルニ足ラスト雖モ）其ノ最モ甚タシキニ至テハ喞子ノ昇降ニ幾分ノ動搖ヲ感スルニ至ル斯ノ如キハ圓筒大傷損ノ直接現象タリ故ニ喞子ノ昇降輕易トナリ漏水

スルニ至レハ衛帶更新ノ時期ニ達シタルモノト覺知セサルヘカラシ而シテ衛帶ノ卷方ハ極メテ堅締シ新規入替ノ當時ハ喞子ノ昇降ニ困難ヲ感スル程度ニ可成堅ク嵌入スルニ非レハ更新ノ効果ナキモノトス新規ノ衛帶ヲ卷キタル喞子ハ再ヒ圓筒内ニ嵌入スルハ至難ヲ感スルカ例ナルヲ以テ先ツ衛帶ノ上ヲ太紐ニテ堅束シ其ノ儘喞子ノ先キ丈ヲ圓筒内ニ入レ置キ太紐ハ卷キタル儘ニテ喞子ノ上部ヲ傷ケサル樣叩キナカラ徐々ニ嵌入スヘシ然ルトキハ喞子ノ進入スルニ從ヒ太紐ハ自然ニ滑リテ喞子ヨリ拔出シ衛帶ノミ緊縮セラレタル儘ニテ巧妙ニ嵌入セラルヘシ又喞子ヲ引出スニハ搖桿ノ接合部ヲ取放チ上部ノ鐵棒ヲ紐ニテ堅束シ兩人ニテ一直線ニ擔キ上クヘシ

第三　喞筒使用後ハ直ニ空運轉ヲ爲シテ内部ノ水ヲ悉ク驅除スヘ

シ殊ニ酷寒地方ニ在テハ内部ノ吸水及吐水ノ兩瓣ヲモ充分ニ乾燥セシムルニ非サレハ直チニ結氷シテ再ヒ使用不能ニ至ルノ虞レ最モ多シ併シ兩瓣ノ開度ハ蝶番ニテ一定ノ寸尺ヲ調節シタルモノナルニ依リ猥リニ其ノ開キ加減ヲ變更スヘカラス特ニ瓣ノ閉著スル上下ノ双面ハ最モ緊要ノ部分ニ屬スルカ故ニ微細ノ疵タモ生セシメサル樣深重ノ注意ヲ拂フヘシ蓋シ兩瓣ハ人ノ呼吸器ニ於ケルカ如ク喞筒ノ生命タルヘキ性格ヲ有シ其ノ吸水及ヒ噴水作用ハ全然兩瓣ノ完全ナル動作ニ基因スルモノトス

第四　喞筒使用ノ際ハ平面ナル場所ヲ選ミテ据付可成動搖ヲ防クヘシ亦吸管使用ノ際ハ其ノ重量ヲ受クヘキ物カ石土ナルトキハ必ス枕ヲ用ヒテ其ノ擦傷ヲ防衛スヘシ

第五　吸管ハ多ク護謨製ニシテ折損シ易キヲ以テ屈曲セシメサル

樣取扱上充分ニ注意スヘシ然シテ其ノ上面ヲ卷キタル綱ハ護謨ノ擦傷ヲ防衛スルノ用ニ供セラレタル物ナルニ付切斷シタルトキハ直チニ修繕スルヲ要ス(通例麻繩ニテモ可ナリ)而シテ護謨ハ乾燥スルヲ忌ムヲ以テ日光ニ晒ラスヲ避クヘク又油類ヲ附著セシメサル樣注意スヘシ護謨製ノ物皆然リトス

第六　吸管ノ沈水程度ハ直下ナルト横ナルトヲ問ハス塵除ノ上部カ常ニ水面ヨリ約一尺内外水下ニアルヲ可トス故ニ豫メ塵除附近ニ繩ヲ附ケ置キ陸上ヨリ加減スヘシ

第七　「ヅーク」製水管ハ勿論總テ「ヅーク」ハ護謨ト正双對ニ著シク濕氣ヲ忌ムヲ以テ使用後ハ勿論充分ニ乾燥セシムヘシ又平素ニ在ツテモ全ク濕氣ナキ場所ヲ選ミテ藏置シ時々日光ニ晒スヲ怠ルヘカラス但シ「ヅーク」ノ品質ハ比較的柔軟ニシテ肉厚キヲ

良品トス

第八　水管ノ疊ミタル折目ハ時々之ヲ變更スヘシ又濡レタル水管ハ勿論地上ヲ引擦ル可ラス

第九　吸水管其ニ女捻ノ方ニハ必ス合皮環ヲ嵌入シテ漏水ヲ防衛ス若シ此ノ合革乾燥スルトキハ落失スルヲ以テ常ニ注意シテ油ヲ注クヘシ管吸ノ合革亦同シ

第十　喞筒ノ運轉力ハ(試驗ノ際ハ格別ナルモ)平素ハ佛蘭西形ニ於テハ使用手一方四人宛合計八人獨逸形ニ於テハ一方三人宛合計六人ナルヲ安全トス喞筒ノ大小ニ拘ハラス過大ノ人力ヲ加フルハ故障若クハ破損ヲ生スルノ原因タルヘシ

但シ運轉人員ヲ時々交代セシムルハ最モ必要ナリト知ルヘシ

消防組規則

明治二十七年二月
勅令第一五號

第一條　府縣知事ハ職權又ハ市町村ノ申請ニ依リ火災ノ警戒防禦ノ爲メ消防組ヲ設置スルコトヲ得

第二條　消防組ノ設置區域ハ市町村ノ區域ニ依ルヘシ但土地ノ狀況ニ依リ市町村内ニ於テ適宜區域ヲ定ムルコトヲ得

第三條　消防組ハ組頭一人小頭若干人及消防手若干人ヲ以テ之ヲ組織ス

組頭及小頭ハ警部長若クハ其ノ委任ヲ受ケタル警察署長之ヲ命免ス

消防手ハ警察署長之ヲ命免ス

(實例)消防組ハ組頭小頭消防手等ノ職員ヲ以テ組織スルモノナ

レハ蒸汽ポンプ又ハ蒸汽ポンプ船等ノ設ケアル場所ト雖モ此以外ニ特別機關ヲ設クルコトハ出來サルヘシ何トナレハ若シ此外ニ別種ノ名義ヲ以テ隨意ニ職員ヲ設クルトキハ遂ニ規則ノ統一ヲ見ルコト能ハサルヘケレハナリ

信號擔當者ヲ消防手以外ニ置クモノナキニアラスト雖モ信號ノコトモ消防事務ノ一部タレハ信號擔當者ノ如キモ消防手中ヨリ採用セサレハ規則ノ精神ニ副ハサルヘシ

第四條　組頭ハ警察官ノ命ヲ承ケ部下ノ指揮取締ニ任シ庶務ニ從事ス

小頭ハ組頭ヲ助ケ組頭差支アルトキハ之ニ代ハルモノトス

第五條　府縣知事ハ市町村會ニ諮問シ消防組ヲ數部ニ分ツコトヲ得

第六條　消防組ハ府縣知事ニ於テ指定シタル警察署長之ヲ指揮監督ス

消防組ハ警察官ノ指揮ニ從ヒ進退スヘシ但火災ニ際シ警察官ノ臨場スル迄町村長又ハ組頭若ハ小頭之レカ指揮ヲ爲スコトヲ得

第七條　消防組ハ其區域外ノ火災ト雖モ警察署長ノ指揮ニ從ヒ其ノ警防ニ應援スヘシ危急ノ場合ニ於テ警察署長前項ノ指揮ヲ爲スノ暇ナキトキハ他ノ警察官警察署長ニ代テ其ノ指揮ヲ爲スコトヲ得

第八條　警部長ハ府縣知事ノ命ヲ承ケテ其ノ地方全體ノ消防組ヲ指揮監督ス

消防組ハ火災警防ノ爲メニアラサレハ集合若クハ運動スルコトヲ得ス但シ警部長若クハ其ノ委任ヲ受ケタル警察署長ニ於テ儀

式訓練及他ノ災害ノ爲メニ集合運動ヲ命シタル場合ハ此ノ限ニアラス

第九條　消防組ノ服務紀律及懲戒ニ關スル規程ハ府縣知事之ヲ定ムヘシ

條十條　消防組ノ擧動治安ニ妨害アリト認ムルトキハ府縣知事ハ之ヲ解ノコトヲ得

第十一條　消防組員ノ手當並ニ被服等ハ市町村會ニ諮問シ府縣知事之ヲ定ム

第十二條　消防組ニ必要ナル器具及建物ハ府縣知事市町村會ニ諮問シ之ヲ定ム

前項ノ器具又建物ハ市町村ニ於テ之ヲ設備スヘシ

第十三條　消防組ニ關スル費用ハ其市町村ノ負擔トス

第十四條　（刪除）

第十五條　（刪除）

第十六條　此ノ規則ヲ施行スル爲メニ必要ナル細則ハ府縣知事之ヲ定ム

第十六條ノ二　府縣知事ハ地方ノ狀況ニ依リ此ノ規則ノ全部若クハ一部ヲ準用シ水災ノ警戒防禦ノ水防組ヲ設ケ又ハ消防組ヲシテ水災警防ノ事務ヲ兼ネシムルコトヲ得

第十七條　此ノ規則ハ沖繩縣及東京市ニ適用セス但第七條ハ東京市ニモ之ヲ適用ス

第十八條　北海道ニ於テハ府縣知事ノ職務ハ北海道廳長官之ヲ行フ東京府郡部ニ於テハ府縣知事ノ職務ハ警視總監之ヲ行ヒ警部長ノ職務ハ警察署長之ヲ行フ

第十九條　此ノ規則中市町村ニ係ル規定ハ北海道ノ區及町村制第百十六條ニ依レル町村組合ニ準用ス

○秋田縣令第五號

消防組規則施行細則左ノ通リ定ム

明治四十二年二月五日　秋田縣知事　森　正隆

消防組規則施行細則

第一章　編制及監督

第一條　市町村ニ於テ消防組ヲ設置廢止又ハ其ノ編制若ハ區域ノ變更ヲ爲サムトスルトキハ市町村長ハ市町村會決議錄ノ謄本ヲ添附シ左ノ事項ヲ具シテ知事ニ申請スヘシ但設置ノ塲合ヲ除ク外關係ナキ事項ヲ具スルヲ要セス

一　設置スヘキ市町村名及其ノ區域

二　部ヲ分ツトキハ其ノ部數及區域

三　編制人員但部ヲ分ツトキハ其ノ各部ノ人員

四　機械器具及建物ノ種類

五　諸手當金額及被服給與ノ有無

消防組ノ設置廢止又ハ名稱編制若ハ區域ノ變更ハ縣令ヲ以テ定ム

第二條　消防組ハ左ノ人員ヲ以テ編制スヘシ

一　組頭　一人

二　小頭　一人

三　副小頭　一人

四　消防手　三十五人以上

消防組ヲ數部ニ分ツトキハ其編制ハ組頭ヲ除クノ外前項ノ人員

ヲ以テ一部ノ定員トシ各部ニ部長ヲ置キ小頭ヲ以テ之ニ充ツ

副小頭ハ事情已ムヲ得サル場合ニ限リ二名ト爲スコトヲ得

第三條　組頭小頭副小頭及部長ノ命免ヲ要スルトキハ警察官署長之ヲ警務長ニ具申スヘシ

第四條　消防組員ハ消防組設置區域内ノ住民ヨリ選任ス

第五條　消防組員ニシテ不適任ト認ムルトキハ何時タリトモ解職スルコトアルヘシ

第六條　消防手ハ第一號樣式ノ誓約書ヲ所轄警察官署長ニ差出スヘシ

第七條　左ニ掲クル者ハ消防組員タルコトヲ得ス

一　禁錮懲役ノ刑ニ處セラレ滿二年ヲ經過セス又ハ經過後ト雖改悛ノ狀ナキ者

二　懲戒處分ニ依リ消防組員ヲ免セラレ滿二年ヲ經過セサル者

三　停職ノ處分ヲ受クルコト三回又ハ免職ノ處分ヲ受クルコト二回ニ至リタル者

四　禁治産者又ハ準禁治産者

五　罹災救助基金ノ外公費ヲ以テ救助中ノ者

六　年齡十八歲未滿ノ者

七　身体羸弱ノ者

八　平素粗暴ノ擧動アル者又ハ酒癖アル等其ノ他素行不良ノ者

第八條　消防組ニ左ノ係員ヲ置キ其ノ人員ハ所轄警察官署長之ヲ定ム

一　筒先係

二　纏係

三　喞筒係
四　給水係
五　器具係
六　信號係

第九條　警察官署長ハ其ノ管轄内ノ消防組ヲ指揮監督ス

第十條　所轄警察官署長ハ毎年二回以上各消防組ヲシテ機械器具ノ使用服務及紀律ノ訓練ヲ爲サシムヘシ

警察署長ハ所管轄警察分署管内ノ消防組ノ聯合演習ヲ爲サムトスルトキハ警務長ノ認可ヲ受ク可シ

前項ノ聯合演習ニ於テ其ノ成績優秀ナルモノニハ第十二號樣式ノ褒狀ヲ授與ス

第十一條　所轄警察官署長ハ自己又ハ其ノ代理者ヲシテ毎年二回

以上部内ノ消防組ヲ巡檢シ規律ノ張弛及機械器具建物等保存ノ狀況ヲ檢査スヘシ

前項檢査ノ成績ハ警務長ニ報告スヘシ

第十二條　警務長ハ臨機消防組ノ巡檢ヲ行フコトアルヘシ

第十三條　强風其ノ他災害防ノ爲特ニ必要アル場合ニ於テ所轄警察官署長ハ消防組ニ警戒巡邏ヲ命シ又ハ特ニ期間及相當ノ人員ヲ指定シ常設勤務ヲ命スルコトヲ得

第十四條　火災現場ニ於テハ指揮官ノ位置ヲ知ラシムル爲第二號樣式ノ標旗又ハ標燈ヲ立ツヘシ

第二章　機械器具建物及被服

第十五條　消防組ニ(部ヲ設ケタルトキハ部毎ニ)設備スヘキ機械器具及建物ハ凡ソ左ノ如シ但旗高張提灯及弓張提灯ハ第三號樣

式ニ依ルヘシ

機械

一 喞筒　一臺以上

器具

一 纏　一本

一 梯子（竹梯子、縄梯子、救助梯子、等）　二挺以上

一 救助袋　二箇以上

一 鳶口　若干

一 布桶　若干

一 玄蕃桶　若干

一 刺叉　若干

一 掛矢槌　若干

一 大鍵縄　二本以上

一 斧　若干

一 大鋸　若干

一 編藁草　若干

一 警鐘　一箇以上

一 旗　一旒

一 高張提灯　若干

一 弓張提灯　若干

一 麻縄　若干

一 喇叭　若干

一 鈴　若干

一　呼子笛ノ類　若干
一　消火器　一箇以上
一　劍鳶口　若干
一　長柄鎌　若干
一　小錨　若干

建物

一　機械器具置場
一　詰所
一　警鐘櫓

市又ハ人家稠密ノ町村ニシテ特別ノ機械器具及其ノ他ノ設備ヲ爲スノ必要アル場合ニ於テハ前項ノ標準ニ依ラサルコトヲ得

纏ハ所轄警察官署長式ヲ行ヒテ之ヲ授與ス

第十六條　消防組員ノ服制ハ第四號樣式ニ依ルヘシ但組頭正副小頭ニ限リ第五號樣式ノ洋服ヲ着用スルコトヲ得

第十七條　給與シタル被服ノ使用期間ハ其ノ使用ニ堪ヘ得ルヲ以テ限度トス

使用期間內退職死亡轉職等ノ場合ハ前項ノ被服ヲ返納スヘシ

第三章　手當

第十八條　市町村ニ於テ消防組員ニ對スル手當其ノ他ノ給與ヲ定ムルトキハ左ノ區別ニ據ルヘシ

一　年手當
二　火災出場手當
三　警戒巡邏手當
四　辨當料（儀式、訓練、機械、器具、掃除等ノ場合ニ限ル）

五　旅費
六　傷痍手當
七　死亡祭祀料
八　遺族扶助料
九　賞與費

前項第六號乃至第八號ハ所轄警察官署長ノ具申ニ依リ警務長之ヲ行フ

第十九條　消防組ニ要スル雜品ハ其ノ必要ニ應シ便宜現品又ハ實費ヲ以テ給與シ其ノ他非常ノ場合ハ特ニ炊出ヲ給スルコトヲ得

第四章　服務及規律

第二十條　消防組ニハ火災記錄、組員名簿、機械器具目錄及水利調査簿並ニ其ノ圖面ヲ備置キ異動アルトキハ速ニ加除訂正スヘシ

第二十一條　組頭(又ハ部ヲ分ツタルモノハ部長)ハ機械器具建物等ノ保存ノ責ニ任ス

機械器具ハ毎月一回手入ヲ爲シ毀損其ノ他異動ヲ生シタルトキハ即時警察官署長ノ檢印ヲ受ケ市町村長ニ届出ツヘシ

第二十二條　組頭及部長交迭ノトキハ引繼目錄ヲ作リ所轄警察官署長ノ檢印ヲ受ケ市町村長ニ届出ツヘシ

第二十三條　所轄警察官署長ハ豫メ消防組ノ應援區域ヲ定メ之ヲ部內消防組ニ指示シ置クヘシ

第二十四條　消防組ノ初出式ハ毎年一月之ヲ行ヒ其期日場所ハ所轄警察官署長之ヲ定ム

前項ノ場合ニハ直ニ警務長ニ報告スヘシ

第二十五條　組頭副小頭病氣其ノ他己ムヲ得サル事故ニ依リ辭職

セムトスルトキハ其ノ事由ヲ記シ所轄警察官署長ヲ經テ警務長ニ願出ツヘシ

消防手ノ場合ハ所轄警察官署長ニ願出ツヘシ

消防組員病氣其ノ他ノ事故ニ依リ勤務ニ服シ難キ時ハ組頭小頭副小頭ハ所轄警察官署長ニ消防手ハ組頭又ハ部長ニ届出ツヘシ

第二十六條　組頭事故アルトキハ小頭代理シ小頭事故アルトキハ副小頭代理ス

部ヲ分ツタル消防組ニ在テハ故參ノ部長ハ組頭ノ代理ヲ爲シ部長ノ代理ハ其ノ部ノ副小頭代理スヘシ

第二十七條　消防組員ハ左ノ事項ヲ遵守スヘシ

一　定制ノ機械器具及被服等ハ消防組トシテ行動スル場合ノ外使用スルコトヲ得ス

二　自己專用ノ器具被服等ハ亡失毀損セサル樣注意スヘシ但亡失毀損シタルトキハ警察官署長ノ檢印ヲ受ケ市町村長ニ届出ツヘシ

三　勤務ニ服スルトキハ定制ノ服裝ヲ爲スヘシ若シ出先ヨリ駈付ケタルトキハ其ノ旨ヲ指揮官ニ申出ツヘシ

四　指揮官ノ命令ナクシテ建物器具ヲ破壞シ又ハ竹木ヲ伐採スルコトヲ得ス

五　他組ト持場ヲ爭フヘカラス

六　喧嘩口論ハ勿論總テ粗略强迫ケ間敷所業ヲ爲スヘカラス

七　勤務中飲酒スヘカラス

八　指揮官ノ命ナクシテ濫リニ消口札ヲ揚クヘカヘス

九　鎭火後ト雖指揮官点檢後ニ非サレハ退場スヘカラス

十　事故ニ托シ又ハ自己ノ功勞ヲ口實トシテ金錢物品ヲ請求シ又ハ私ニ贈與ヲ受ケ其ノ他消防組ノ体面ヲ汚損スルカ如キ所業ヲ爲スヘカラス

十一　器具ヲ使用シタルトキハ即時叮寧ニ掃除シ檢査ヲ受クヘシ

十二　警察官署長ノ許可ナクシテ猥リニ集合スヘカラス

第二十八條　消防組ハ命令ニ規定アルノ外必要ノ事項ニ關シ警察官署長ノ認可ヲ受ケ規約ヲ設クルコトヲ得

警察官署長ニ於テ前項ノ認可ヲ與ヘムトスルトキハ警務長ノ指揮ヲ受クヘシ

第二十九條　警務長ニ於テ必要アリト認ムルトキハ消防組頭ヲ召集スルコトアルヘシ

第五章　賞罰

第三十條　消防組及組員ニ對スル賞罰ハ所轄警察官署長ノ具申ニ依リ警務長之ヲ行フ但消防手ノ懲戒ハ所轄警察官署長之ヲ行フ

第三十一條　消防組又ハ其部ニシテ左ノ各號ノ一ニ該當スルモノニハ金馬簾ノ使用ヲ認許（第六號樣式ノ認許ヲ添付ス）スルコトヲ得但一回一條ニ限ル（樣式略）

一　平素ノ紀律訓練ニシテ他ノ模範タルモノ

二　災害ニ當リ特ニ拔群ノ功勞アルモノ

第三十二條　金馬簾使用ノ認許ヲ得タル消防組又ハ其ノ部ニシテ左ノ各號ノ一ニ該當スルトキハ其ノ認許ヲ取消シ又ハ其ノ使用ヲ停止スルコトアルヘシ

一　紀律ヲ亂シ訓練退衰セリト認メタルトキ
二　過失怠慢ノ廉アルトキ

第三十三條　消防組員ニシテ左ノ各號ノ一ニ該當スル者ニハ次ノ區別ニ據リ其ノ名譽ヲ表彰ス

一　三十年以上勤續シ功勞アル者　金牌
二　二十年以上勤續シ功勞アル者　銀牌
三　十年以上勤續シ功勞アル者　功勞証
四　消防上ノ改善ヲ圖リ其ノ功績顯著ナル者　金製有功章
五　火災現場ニ於テ功勞拔群ナル者　金製功勞章
六　紀律嚴肅精勵格動ニシテ消防ニ關スル技藝ニ熟達スル者　賞狀

第三十四條　消防組員ノ懲戒ヲ受クヘキ場合左ノ如シ

一　警察官又ハ上級者ニ反抗シ若ハ其命令ニ服從セサルトキ
二　職務上ノ義務ニ違背シ又ハ職務ヲ怠リタルトキ
三　消防組ノ体面ヲ汚損スルノ所爲アリタルトキ

第三十五條　懲戒ハ左ノ如シ

一　免職
二　停職
三　譴責

本則ニ依リ名譽ノ表彰ヲ受ケタル者ニシテ前項ノ懲戒又ハ犯罪ニ依リ處分ヲ受ケタルトキハ其ノ表彰ヲ褫奪ス

第三十六條　消防組員ニシテ名譽ノ表彰ヲ受ケ若クハ懲戒セラレ

タル者アルトキハ組頭ハ其ノ組内ニ周知セシムヘシ

第六章　信號

第三十七條　消防信號左ノ如シ

一　近火信號　火ノ見櫓ヨリ三町以内ノ出火ヲ報スルモノトス　（亂点連打）

二　總出信號　市町村内ノ出火ヲ報スルモノトス　（三点連打）

三　遠火信號　遠隔ノ火災ヲ報スルモノトス　（一点三打）

四　應援信號　應援ノ必要アルトキ之ヲ報スルモノトス　（二点連打）

五　鎮火信號　鎮火ノ際報スルモノトス

六　演習信號　演習ノ爲メ消防組員ヲ召集スルトキ　（班点一回）　（四点三回以上）

附　則

第三十八條　水防組ノ設置ニ關シテハ本則ヲ準用ス

第三十九條　本則ハ明治四十二年四月一日ヨリ施行ス

第四十條　本則第十六條ノ服制中帽子ハ明治四十四年三月迄給與セサルコトヲ得

第四十一條　明治三十一年三月秋田縣令第十九號消防組規則施行細則ハ本則施行ノ日ヨリ之ヲ廢止ス

第一様式

誓約書

（用紙半紙）

私儀

今般消防手ニ御採用相成候上ハ左ノ件々確守可仕候

一 職務ニ忠實精勤スル事

二 職務規則ハ勿論總テ指揮命令ハ謹テ遵守スル事

三 喧嘩口論ハ勿論總テ粗暴強迫ケ間敷所業ヲ爲サヽル事

四 事故ニ托シ又ハ自己ノ功勞ヲ口實トシテ金錢物品ヲ請求シ又ハ私ニ贈與ヲ受ケ其ノ他消防組ノ体面ヲ汚損スルカ如キ所業ヲ爲サヽル事

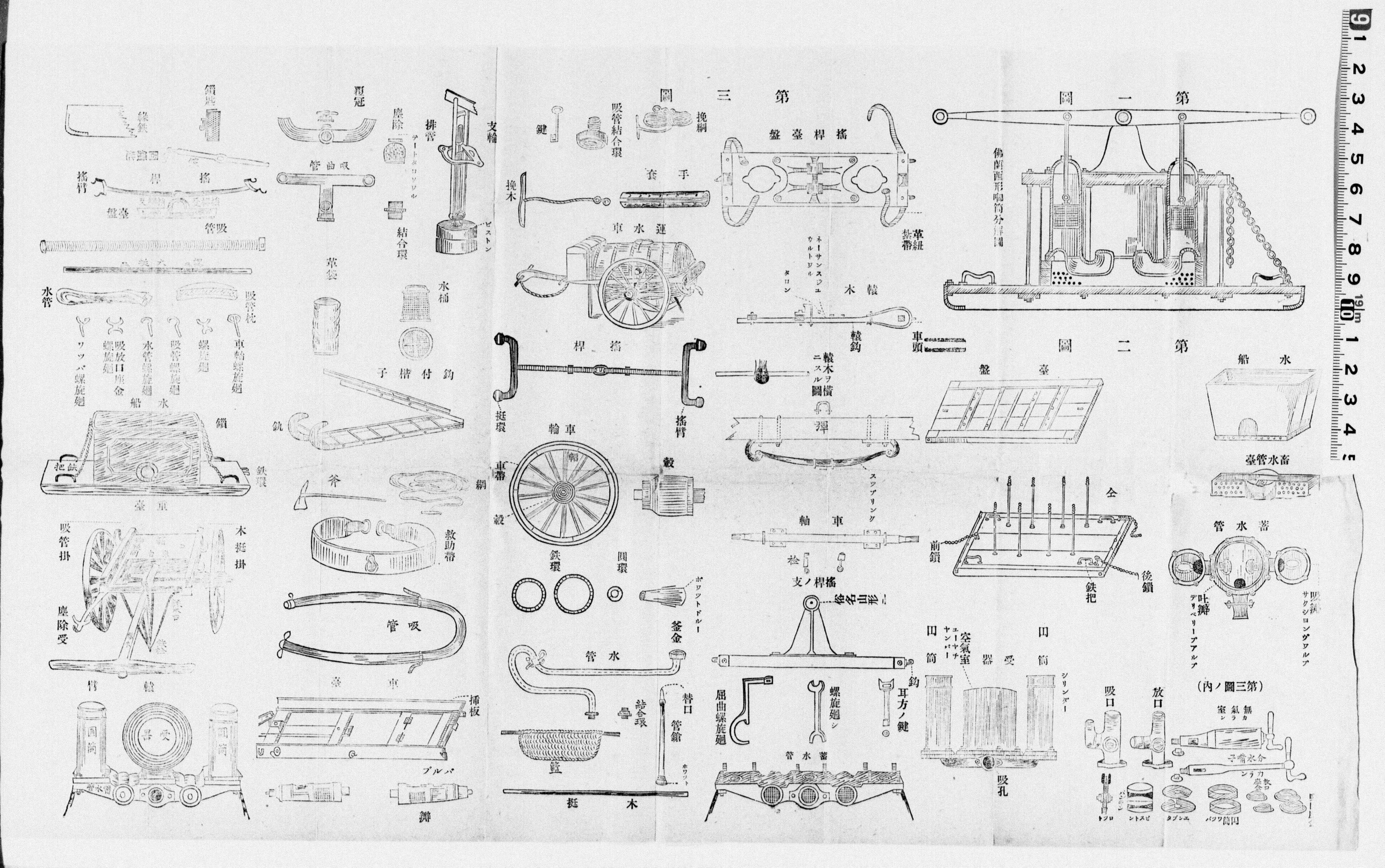
五 正當ノ事由ナクシテ辭職セサル事

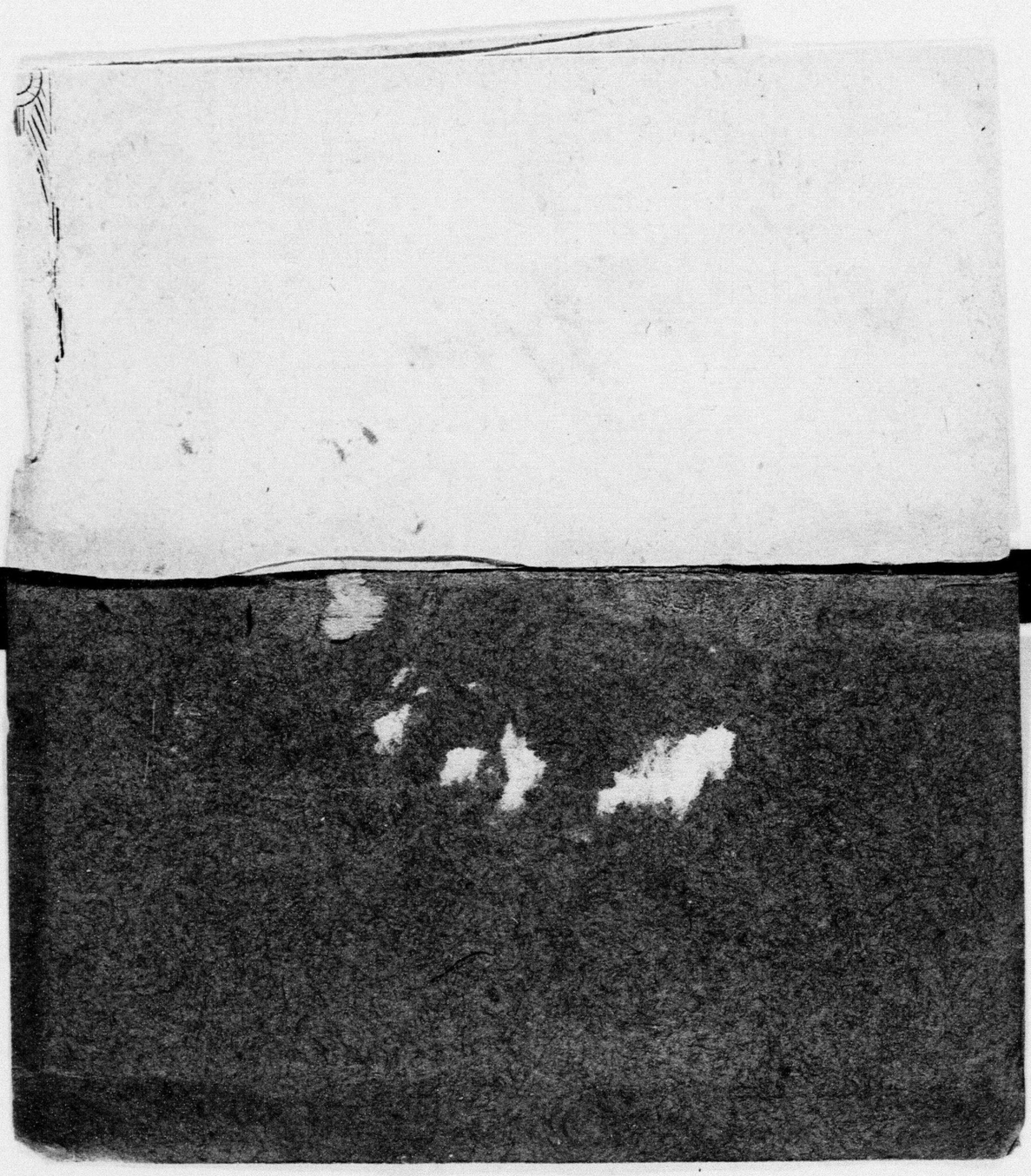
右誓約如件

大正　年　月　日

縣國郡市町村番地身分

何　某　印


第一圖
佛蘭西形喞筒分解圖
第二圖
第三圖
搖桿臺盤
革紐
紮帶
轅木
轅鈎
車頭
ネーサンスジュ
ウルトリル
タロン
轅木ヲ横ニスル圖
彈
スプリング
軸車
栓
支ノ桿搖
後ろ山形
搖
鈎
耳方ノ鍵
螺旋廻シ
屈曲螺旋廻
管水蓄
空氣室
ユーヤチ
ヤンバー
凹筒
受器
凹筒
シリンダー
吸孔
臺盤
水船
臺管水畜
仝
前鎖
後鎖
鉄把
管水蓄
吐瓣
デリベリーバアルブ
吸鉄
サクションヴアルブ
(第三圖ノ内)
吸口
放口
無氣室
ンラカ
子嘴水分
ンラカ
散口
ドロ
ントスピ
タブシエ
パツワ筒円
支輪
ピストン
排管
アートタロソル
塵除
結合環
水桶
鈎付
子楷
吸管結合環
鍵
挽綱
挽木
手套
蓮水車
桿搖
挺環
搖臂
車輪
輻
車帶
轂
鉄環
圓環
ボワットドルー
釜金
水管
結合環
替口
管鎗
ホワット
藍
挺木
覆冠
吸曲管
革套
吸管
水管
吸管栓
車軸螺旋廻
螺旋廻
吸管螺旋廻
水管螺旋廻
吸放口座金
螺旋廻
ワツバ螺旋廻
船水
鎖
鉄環
鉄把
臺車
鎖
鉞
斧
綱
救助帶
吸管
臺車
挿板
ブルバ
瓣
木挺掛
吸管掛
塵除受
臺車
筒
筒
受器
管水蓄



終

大正二年六月廿五日印刷
大正二年六月廿九日發行

編輯兼發行者　秋田市檜山本町　柳原庭之助

印刷所　秋田市檜山本町　はかりや活版印刷部

發賣所　秋田市大町二丁目十七番地　石川書店
電話一二九番
振替口座三九九九番

はかりや活版印刷部印行